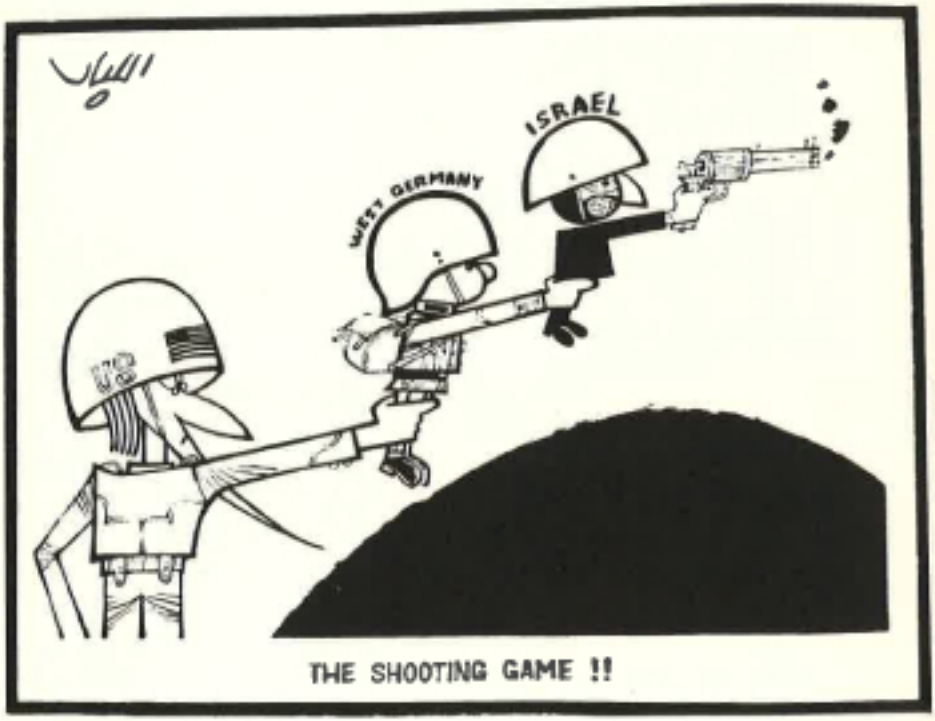
書評

No. 51
1980. 4



書評編集委員会

書評／目次

No.51　1980. 4

1　新入生諸君へ　小川　悟

2　羅針盤

6　ワンパターン（犬の卒倒）に　中農　晶三
　　かたよらない日本人論

15　甘えの世代と沈潜の文学　吉田　永宏
　　——文学状況の批判——

26　日本の大学とドイツの大学生について
　　D.シャウベッカー

——書評——

37「ユースカルチャー史批判　竹内　洋

45　細見　英著「経済学批判と弁証法」　竹内　良知

コラム

53　映像——映画はだれのものか　松山　秋邦

研究ノート

59　＝ランボー研究余滴13＝
　　ランボーの沈黙と最後　山村　嘉己

74　書籍だより（刊全集一覧）　書　籍　部

79　お知らせ

　　編集後記

表紙／Secretariat of the Afro-Asian Journalists' Association刊
「Selections of Afro-Asian People's Anti-Imperialist Caricatures」より

題字／文学部教授　網干善教氏

新入生諸君へ

小川　悟

諸君は、激烈な入学試験という関門を通ってこられた。今や、いささか落ち着いた時間を持つことができるだろう。諸君は、何のために大学に学ぶのかということを、考えてみたことがあるだろうか。諸君の従事する学問が、人間のためにどのように役立つのか、考えてみたことがあるだろうか。春らんまんの陽気に欺かれて、そして一つの難関を突破したという満足感にひたるだけの今日この頃ではないだろうか。今この時に、諸君は考えなければならない。大学が学問を以って第一義とするところであるならば、諸君は、諸君の学問について考えなければならない。それが、諸君の四年間の出発点である。

最近は、物を考えない学生、矛盾や問題に敏感に反応できない学生、逃避主義的な無関心な学生が増大している。たぶん諸君も例外ではないかも知れないが、受験勉強だけがすべてであるといった高校生活を送ってきた大多数の学生諸君は、いかなる場合も独創的な発想を持つことができない。自らの思惟を培うことができない諸君が多いのである。それは、読書量の貧困さに起因する。大学生活の大半は、読むことと考えることに費やされるべきである。大学は、とんだりはねたり、楽しく時を過すところではない。欧米の大学生と本学の学生を比較してみると、これでも大学生かと慨嘆したくなることがある。大学では就職へのパスポートを貰えばよいと考える諸君は、去るべきである。

ある意味で、大学は諸君にとって安全地帯である。しかしこの安全地帯は、自らを律することのできないものにとっては、一時の逃避場所にすぎなくなるだろう。平々凡々の四年間は、諸君に何ものをも生み出さないだろう。

（文学部教授・おがわ　さとる）

'80 4　羅針盤

この51号はもともと今年の一月に発行予定であったが学費大幅値上げ発表とそれに対する全学バリケードストライキ、そして権力導入。このようなロックアウト体制下に書評を発行すべきでない、という判断の下に延期されて四月に発行されることになった。従って羅針盤も当初の原稿をボツにして、新入生向けにふさわしい内容に変更すべきという意見もあったが、学費値上問題は全学生の避けては通れない問題であるから、むしろ、当時の原稿をそのまま掲載して、当時の私たちの問題意識を全ての新入生に現わにすべきだということになった。

ともかくにも、再びキャンパスに春が巡って来た。冷たい北風がいつしか温むと確実に自然の草花は芽吹き始める。やはり自然の力は偉大といわねばならない。分子生物学の世界では遺伝子の組み替えの研究と共に、生物時計の解明が課題となっている。春が来れば花が咲き、秋には結実する。これは一体いかなる条件を判断規準にしているのか。又、遺伝子の中の何処にこの判断力が組み込まれているのかは全くの未知のことである。ただ私たちがごく自然にそれが当然であると思い込んでいるにすぎない。

同様に君たちの可能性も未知であり、具体的に入学以後君たちが何をするかによって決定されるのだ。何をするかは君自身の問題だ。しかし、既成の枠に入るというだけの勇気のないことは止めよう。

（以後は一月の原稿のままです）

'80 1　羅針盤

筑波大学というと中教審に基づいた、俗に筑波化と表現される程、自治会もない徹底した管理支配の行われている大学、というのがごく一般的な認識である。ところが、その筑波大学で今年初めて学園祭実行委を中心として、学生達が大学当局の学生管理策動を打ち砕き、自主学園祭を構えてゆく中で、自分たちの学園祭を克ち取った。自主的な学園祭なんていうものは、大学ではごく当り前であるはずなのに、あの筑波大学であるからこそ、学生による自主的大学祭の開催は画期的であり、ニューズ的価値があるのだろう。

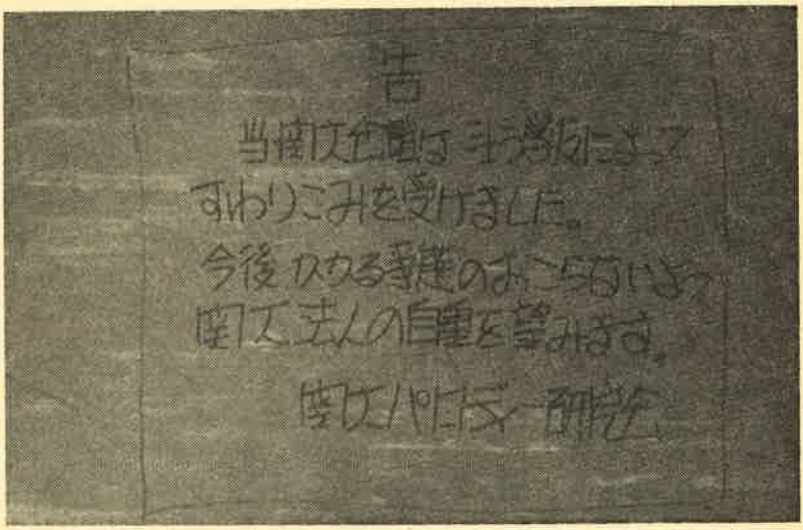
しかしながら、筑波化といわれる管理支配体制の徹底化は、果して筑波大学だけであろうか？　もちろん否である。いや、むしろ筑波化はすでに全国の大学で行われており、要はその管理支配の方法が違うだけではないだろうか？

おそらく多くの関大人＝学生教職員は、関大は筑波大学みたいなことはない、と言うだろう。確かに中学生の学校新聞なみの大学新聞に対する検閲制度はないし、サークル活動も一見は、それなりに自由に自主的に活動しているかのようである。又、筑波大学のように自治会が認められていないわけでもない。集会が禁止されているわけでもない。

むしろ全く逆である。本年一月一日の校友会新聞「関大」には、校友会幹部から一部学友会が崩壊してから十二年が経過しているが、学友会は大学における〝知〟

〝徳〟〝体〟を表現するものであり、是非とも再建せねばならない。と提起されており、学生が学友会の再建の仕方も知らないなら、事務職員、教職員が協力して教えてやるべきだ、とまで言っている。これは明らかに大学当局による右からの近代化政策であり、右からの再編と言える。だが、これは単なる再編ではない。校友会からの一部学友会の再建提起はいかなる自治会が再建されようとも、すでに関大の管理支配体制は近代的に完成されており、いかなることにも対処出来ることを意味しているからである。ということはある意味で、関大の管理支配体制は筑波大学よりも進んでおり、より現代的に支配体制が整備されているといえる。

関大に於ける管理支配はそれ故に、非常に柔軟な城内的自由をアメとして与え、結果としてこの城内よりは一歩たりともはみ出させない、という強固なムチを振りめぐらした、疑似的な民主体制ではないだろうか？　それらのことを表現することとして、一つには誠之館のサークルボックスの使用が、午後八時までに限定されており、それのみならず、各学部の研究室の使用に関しても午後八時までと限定されていることがある。サークルボックスとは、そもそもサークルが自主的な創造的な活動をするためのものではないのか？　各研究室は創造的な独自性のある研究を行なう所ではないのか？　否、それ以前の問題として そもそも大学とは、教育・研究機関であるのか？　と問う必要があるかも知れない。でなけ



れば大学における主体とは教育・研究に携わる研究者・学生であるということが明らかにならないからである。自主的な創造的な活動に対して、午後八時にはその活動を止めさせて、追い出すという現在の関大体制とは、やはり、より近代化的に支配管理の整備された体制と言えるのではないだろうか。それと同時に午後八時になるとそれがごく当り前かのように自主的にサークル活動を止めて帰る学生達の活動とは、一体いかなる内実があるのだろうか？

ここにも関大における文化の不毛状況の一つの原因があるように思われる。

又、同じく八時になると、守衛室から催促されて、自からの研究を打ち切って帰る研究者＝学者とは一体いかなる研究内容をもつのかは、いささか疑問といわざるをえない。少くとも自からの研究活動の拠点を自由に使用することのできない研究者とは、その在り方において疑問を感じざるを得ない。これは決して住宅事情が良くなった、ということで解決される問題ではなく、研究に対する姿勢の問題としてである。関大にはその他にも大学本部のある関大会館に、学生の立入りを禁止する、という前代未聞の立看板が立っている。大学の主体たる学生に対して立入りを禁止する場所があるとは、まさに関大の本質を現わしているといえる。学費問題についても、理事会及び学長は一切学生と話し合おうとしない。話し合いを拒否する大学とは一体何か？　（F）

ワンパターン(犬の卒倒)に かたよらない日本人論

中農晶三

I　亜外国人から見た日本人論

一九七九年は『ジャパン・アズ・ナンバーワン』をはじめ、外国人による日本人論がたくさん出版された。なぜ日本人論がそれほどにぎやかになったのか、それにはいくつかの理由があるだろう。ひとつには西洋の技術には限界があること、つまり物質中心主義を信奉してきた西洋的発想が、エネルギー危機を前にして、転回点にさしかかっていること。またそのような時代に際して日本人がもっているしぶとい活力、根強い経済発展などがあるだろう。

わたしはライシャワーの『ザ・ジャパニーズ』を読んだ彼の父は新教の宣教師で、長い間東京女子大に関係していたし、彼自身日本で生まれ、東大、京大で学び、日本人の妻をめとっており、駐日大使をつとめていたので、日本人論を書く外国人としては、最適のひとりであろう。

それだけに読後感は、正直にいってつまらなかった。日本の歴史的背景にしろ、社会にしろ、政治にしろ、われわれが知りすぎていることが、たいした誤解もなく、しごく当り前に述べられている。だがこれは、ライシャワーの責任ではない。彼はこの本を歴史家のひとりとして、外国人読者を対象として書いたのだ。その限りではチョンマゲを結った車夫が、いまだに人力車を引いてい

るイギリスの教科書などよりは、はるかにすぐれている。ライシャワーが知日家と呼ばれるゆえんである。

それよりもライシャワーのライフワーク『ザ・ジャパニーズ』のような大著の訳本が、日本の読者に好んで読まれるところに問題がある。われわれには自明のことであっても、彼自身ライフワークと称するほど、外国人にとって日本人はわかりにくい。それと同時に愛読する日本人にも、日本人がわかりにくくなっているのではないか。コンバースのスニーカーか、フライのウェスタンブーツをはき、スタジアム・ジャンパーにコーデュロイのストレートパンツで身を固め、デジタルの腕時計をはめ髪を世良公則のカットにして、カワサキのラケットをもってテニスをしている若者たちには、外国人の目から見た日本人論に興味があるのかもしれない。

ジャック・ダニエルズの黒を飲むことにあこがれる彼らは、亜西洋人と呼ぶべきかもしれない。米の飯を食べることよりも、パン、コーンラーメン、スパゲッティ、マカロニを「趣食」とすることを好み、横文字の製品を身につけたり、持ったりする彼らは、脱日本人化を目指しているといえよう。だが性急に彼らを非難してはいけない。

外国人の目から見た日本人観で共通しているのは、日本人ほど日本人と外国人の間に、はっきり一線を引いている存在はないという点である。世界全体が国際化している中で、日本人ほど隔絶感を抱き、国際社会で孤立している民族も珍らしい。その中で若者たちが亜西洋人となって、国際化に協力しているともいえよう。ライシャワーはいう。「国際主義の方向に向うために、日本が克服しなければならない障害はまことに大きい。ただ私はこの点をあまりにも暗欝に描きすぎたのかもしれない。私が対象にしたのは、主として中高年層と彼らがかかえる問題であった。それにひきかえ、近ごろの若者には、あたかも新種を思わせるものがある。彼らは古いステロタイプの多くを無意識のうちに否定し、先人のもつ偏見や恐怖からもかなり自由である」と。

若者たちは新しいことばを作ったり、はやらせたりするのが上手だ。わたしは十年あまり前、親しいアメリカ人がヘッド・ショップ、ヘッド・バーということばを連発するのを聞いて、途惑ったことがある。ヘッドといえば頭のことであり、モーニング・ヘッドといったらふつか酔いであるぐらいは知っているが、どうも話の様子では帽子を売っている店でもないし、ふつか酔いをするバーでもない。結局ヘッドショップとは、サイケデリックな製品、インディアン・バンドなどを売っている店だと

分ってヘッドという若者用語は、人間またはソウルを意味すると知った。

若者がはやらせることばには、それなりの社会的意味がある。ヘッドということばがアメリカではやったころは、ベトナム戦争がたけなわの時期で、アメリカの若者たちは反体制の意味をこめて、人間とかソウルに力点をおいたのだと思う。

だからわたしは外国人から見た日本人論には、たいした興味がないので、亜西洋人または亜外国人がはやらせる日本人論を、主として語ってみたい。最近ワンパターン、または略してワンパということばがはやったが、こ

れはライシャワーが「ごく最近のステロタイプは、なるほど内容においては軍国主義とはちがうが、気違いじみた一点集中主義という意味では同工異曲の、エコノミック・アニマルというそれである」と書いた日本人論に通ずる日本人批判がある。またそれを犬の卒倒と意訳するところがニクイ。彼らはオーモーレツに働いた高度成長時代の昭和元禄田舎芝居をシラケた観客の目で眺めている。

II　亜外国人の住む大衆社会

「将来の世界的な方向としての大衆社会現象については、プラスとマイナスの評価がうずまいており、通常はアメリカをもってその旗手とみなす風潮がつよいのだがむしろ現代日本の方がより顕著にその傾向を示しているといえそうである」と『ザ・ジャパニーズ』で述べたライシャワーは、アメリカよりも顕著な日本の大衆社会の原因を、ふたつのところに求めている。

ひとつは日本の教育のせいであって、はじめの段階のカリキュラムは細かい点まで規定されている。高校でさえ大学入試の準備に追われ、どうしても画一的にならざるをえない。大学はといえば「大量の学生を迎え、財政

困難にあえいでいることもあって、学部の別を立てるのがせいぜいで、その以上の多様性を示すには至らない。」その結果すべての日本人は中学、高校の間、画一的な教育を受け、大学に進んでも「同様に多様性に乏しい教育にさらされ、学業をおえたのちに、これまた情報と心的態度の両面において高度の画一性をもつ社会に入りこんでいく、ということになる。その画一性たるや、小さな原始社会、もしくは現代の全体主義国家もかくやと思われるほどである。」と、ライシャワーは分析している。

六才から二十三才まで画一的な教育を受け、卒業後もまたタテ割りの画一的な社会にとびこんで行く。卒業してニューファミリーになれば「俺より先に寝てはいけない。」と、関白宣言をして、ウサをはらすより手だてがないではないか。だがこれもまた画一的なタテ割り家庭である。こうして、同じものを食べ、同じものを着、同じものを持つ画一的な大衆社会が形成されて行く。モラトリアム人間を語る人は、亜外国人が住む日本の大衆社会を直視して、モラトリアムの意味を、亜外国人が社会に出て、なんらかの役割の鋳型にはめこまれる「役割猶余期間」と、理解すべきであろう。

モラトリアムの時間もなく、またたく間にスーパースターになったジョン・レノンは「とても辛い」という詩を書いている。

生きなければならない
愛さなければ　ひとかどの人間にならなければ
人を押しのけなければならない
しかし　とても辛い　本当に辛いこと
ときどきおれは墜落気分だ

食わなければならない
飲まなければ　何かを感じなければ
心配しなければならない
とても辛い　本当に辛いこと
ときどきおれは墜落気分だ……　（三木　卓訳）

実に平凡な詩である。ビートルズらしさがない。それとともにスーパースターの辛さがよくわかる。あとで挙げる日本の大象社会化のマスコミ要因の実感が、にじみ出ている。レノンの下手な詩にくらべると、初期のビートルズの歌詞は、はるかによかった。

「丘の上の愚者」
来る日も来る日も

ただひとり丘のうえに
馬鹿のような薄笑いをうかべていたあのひとが
じっと動かずにいる
誰もそのひとと知り合いになりたがらない
見ればただの薄馬鹿のようだし
そのひとのほうでもなにも言わない
しかし丘の上の愚者は
沈んでいく陽を見る
頭のなかの目が
回っている地球を見る……（中略）

誰もその人を好いてはいないようだ
その人の勝手にさせている
それにそのひとは
けっして自分の感情をあらわさない
しかし丘のうえの愚者は
沈んでいく陽を見る
頭のなかの目が
回っている地球を見る

その人はほかの人の言うことに
耳をかさない

ほかの人たちこそ馬鹿なのだと
知っているから
みんなその人が嫌いなのだ……　（片岡義男訳）

大衆社会のみんなに嫌われている丘の上の愚者は、なんという賢者だろう。みんなのように画一化されていないし、がんじがらめに管理されてもいない。馬鹿みたいな薄笑いをうかべて、うっとりと頭の中の目で、地球上の動きを眺めている。

日本の大衆社会のもうひとつの要因は、マスコミの特異性にある。「日本におけるテレビの役割は、アメリカのそれに近い。全国ネット局は、ほぼ同一の番組を提供することで、多くの画一性を生み出す。戦前には画然と分かれていた都市部と農村部との価値感や態度上の凸凹をならして平均化したのは、何といってもテレビであった」と指摘するライシャワーは、新聞の分析にも筆を進める。

日本とアメリカのテレビが大差ないのに対して、地理的に広いアメリカの新聞が、いきおいローカル新聞にならざるをえないのに対して、日本の大新聞は全国紙である。「日本の新聞の大きな弱点は、取り上げるニュース種とその取り扱いの両面で、いかにも画一的だという点である。客観報道が建て前であるので、事象を個性豊かに分析してみるたぐいの記事や解説はまれである。各紙とも、同じような見出しを翻えて、同じような論説をかかげているので、一見、互いに言い換えをこととしているかのごとくである。その結果、何千万人もの日本人が同じテレビと同じ新聞報道で武装され、同じ事実や関心や態度を抱きながら、日ごと職場に通うという仕儀になる。」と、彼は断定している。結局日本人は、同じように規格化された教育と、共通情報源としてのマスコミのせいで、高度の画一性をもっているということになる。

しかしライシャワーにはお気の毒だが、日本人はしかく単純ではない。かつてテレビでブームを呼んだスーパーマンが、アメリカで映画化されて、夏休みの子供を当てこんで、昨年六月末に上映されたが、いざフタをあけてみると、スーパー観客動員にはいたらなかった。

さすがにライシャワーもその辺は、ぬかりなく見抜いている。「このように大衆化され規格化されているとはいえ、これが現代日本文化のもっとも重要な側面であるとみなすのは正しくない。ましてやこれをもってすべてであると断じることはあやまっている。……あらゆる種類の人々が芸術的創造性を発揮しており、若者は新しい生活様式に息づいている」。

III　亜外国人のはやりことば

新しい生活様式を身につけている亜外国人は、街に出ると腰のベルトにテープレコーダーを下げ、ヘッドホンで耳を押えて歩くウォークマンである。そしてチャコヤ（サ店はもう古い）にシティーギャルとコーヒーをのみに行くとき以外は、家でインスタントコーヒーをのんでいるくせに、またタコヤキに目がないユカイな日本人の新種である。だから彼らがつくり、はやらせることばは亜国際的となるのだ。

クリーン・ベースボールをスローガンにかかげた長島監督率いる巨人軍が、ダーティ・ボールを投げた。ダーティとはよごれた、不潔なという意味のほかに、不正な下劣なというニュアンスもある。ダーティ・ワークとはベテンのことである。そこから「エガワル」ということばが生まれた。このことばはいかにも焦げたタコヤキの匂いがする。阪神ファンのわたくしとしては、わたしのゼミの卒業生のマンガをもじって「ガンバレ!!コバヤシくん」と言いたい。この辺が日本人らしい判官びいきのところであるが、どだい石井寿一君は、関大在学中からヤクルトファンであった。

エガワルのほかにも……るということばが、ぞくぞくと生まれた。「セキネル」は関根恵子の雲がくれにひっかけて、行方をくらますこと。今年封切られる「影武者」の黒沢明監督と勝新太郎の不和は、仲たがいを意味する「カゲムシャる」となる。この筆法で行くと今年原油一バレル三十ドル時代に突入して、電気、ガスをはじめ諸物価が高騰し、庶民の暮らしが苦しくなるのに、公費天国の住人の大平首相が、来年度に一般消費税の導入をはかって、公費を増やそうとしているのを見て、わたし流に「アーウーる」とこれを呼ぶのはどうだろう。人をないがしろにする、という意味である。（哀を売る）と意訳してもよい。

「サタデー・ナイト・フィーバー」の合成語「大平フィーばー」もおもしろいが、ウサギ小屋に住む日本人の小学校にひっかけた「アヒル小屋通信簿」も、なかなかの傑作である。各地の教育委員会が自ら選び、採用した教科書を使わせてはいるが、文部省の検定済というサクがある。アヒル小屋通信簿というのは、成積の1と2が多いのを指す。1が小屋のサクで、2がアヒル。金網を張ったフェンスのウサギ小屋に住む大学生はもって冥すべきか。

ウサギ小屋の中で力んでムキになる人は「ムキンポ」

だが、日本人らしくない亜外国人を「バナナ」と呼ぶ。皮は黄色い日本人だが、中身は白い外国人。バナナたちは特有の亜国際語をつくるのにたけている。

テストに失敗したときなどは「ヘグル」と叫び、まいった、まいったというかわりに「マイッチング」。もう少しよい点数や、もう少し酒が欲しいときは「ウォンチット」。教師や友人から白眼視されたときは「ホワイト・ルック」とぼやき、ついてないなあ！と思って「天中ってる」と、しらけて「ホワイト・キック」（白蹴る）になってしまう。ではこの辺で「バイナラ」（さよなら）。

大蔵、通産などの若干官僚は「インタメスチック」ということばを、はやらせているそうだが、これはインタナショナル（国際的）とドメスチック（自国的）の合成語である。スタジャンやダウンパを身につけて、焼鳥で一杯のんでいる若者たちは、まさにインタメスチックな人種であるといえる。

日本が国際化の方向に向うために、その期待をライシャワーも日本の若者たちにかけて「彼らの外国語能力もなにがしかの改善を見せているが、それは教授方法がよくなったからというよりは、むしろ彼ら自身の熱心に由来するといえそうである。海外での生活体験にかける彼らの熱情は大きい。外国人との付き合いも、実にのびのびしている」とほめている。

そして「もちろん彼らも、はじめからの勢いはどこへやら、やがては伝統的な型に立ち戻ってしまう、という面もあろう。だが、いつの日にか、彼らはその型自体を打ち破っていくであろう。いずれにせよ、日本が隔絶感をはなれ、真の国際主義に転換していくのは、制度そのものの改良よりは、世代の交代に拠るところが多かろう、と思われるのである」と結んでいる。

ほんとにそうならうれしいのだが――ナーンチャッテ。

（参考資料）
エドウィン・O・ライシャワー著　国弘正雄訳『ザ・ジャパニーズ』文芸春秋　一九七九年
朝日新聞夕刊　一九七九年十二月十日「ことばザ・70年代」

（社会学部教授・なかの　しょうぞう）

甘えの世代と沈潜の文学

——文学状況の批判——

吉田永宏

1

いま私の机上に中上健次「枯木灘」（河出書房新社）高橋三千綱「九月の空」（同）、栗本薫「ぼくらの時代」（講談社）、同「ぼくらの気持」（同）と四冊の本が置かれている。これらの作品に触れながら現代文学の状況を論ぜよ、というのが編集者から私に与えられた課題なのであるが、正直言ってうっとうしい気持しか湧いて来ない。そこで本論にはいる前に一つのことを書いておきたい。

十余年も以前、ある高校生向けの雑誌でシナリオライターの石堂淑郎が書いた文を読んだことがある。その当時、私は奈良の県立高校の教師であった。石堂淑郎の文章はのっけから高校生に対して喧嘩を売ったもので、現在の高校生はダメだ、高校生に期待などはかけられない、若者の前途には洋々たるものがあるなどとは自分には言うことができない、というものであった。その理由として石堂淑郎は次のようなことを挙げていた。——高校生を対象として行なわれたアンケートがあって、その中の「尊敬する人物」の第一位が当時のケネディ米大統領であった。そして反戦フォーク歌手に対しては圧倒的多数が好きだ、大ファンだと答えている。フロンティア精神なるものがもてはやされている時代であったからケネディ大統領を最も尊敬するという高校生が沢山いたとして

アメリカ製　トロイの「平和の鳩」

も不思議ではない。マスコミがあげて喧伝し書き立てるものだから、その結果としてもそれは当然で、十分に理解できる。しかしそれならば、そのケネディを尊敬するという高校生が同時にジョーン・バエズを好きだ支持するというのは一体どう考えればよいのだろうか。ジョーン・バエズはベトナム戦争に反対し、つまりケネディ大統領のベトナム政策に反対の意志を表明し、反戦のフォークソングをうたって回ったが故にケネディからアメリカでの上演活動を禁止され、放逐された歌手ではないか。ケネディとジョーンバエズを共に支持するというのではその高校生の頭の中ではベトナムは一体どうなっているのだろう。このような矛盾した解答を平気でするような非論理的な高校生などは絶対にダメだ。その上、大江健三郎はと問われれば、殆んどが読んでいないと答え、椎名麟三郎はと問われれば、名前を聞いたこともないという始末。まったく君達は、と石堂淑郎は高校生に対して憤懣やるかたないという思いの文章をそこに綴っていた。このような若者に期待などかけてはだめだ、と。

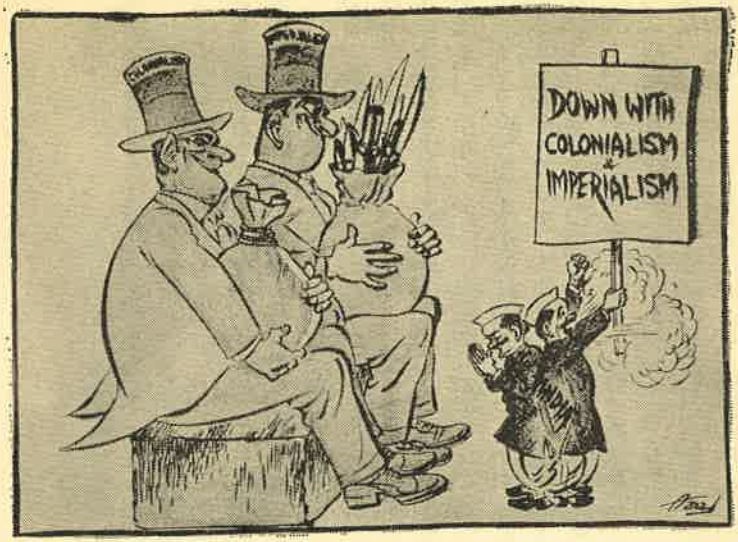
当時の高校生は現在三十歳ぐらいにもうなっていようか。高校教師であった私は、石堂淑郎の文章を読んで、論理的にはそれに賛成し（つまり高校生を攻撃する側に立つ）ながら、一方では、しかしこう言ってしまえば受験勉強に追われている高校生が可哀そうではないか、我々教師もこのようなムードに弱い非論理的な人間を創り出していることの一半の責任を負わなければならないのではなかろうかとの思いが強くした。高校生の実態は石堂淑郎の指摘する通りのものであって、それを弁護する気持は私にはまったくなかったが、教育現場に携わっている者としての自己批判とでもいうべき思いでそれはあった。

2

そのようなムードに流され易い非論理的な思考というものは、現在では克服し得た事柄なのであろうか。

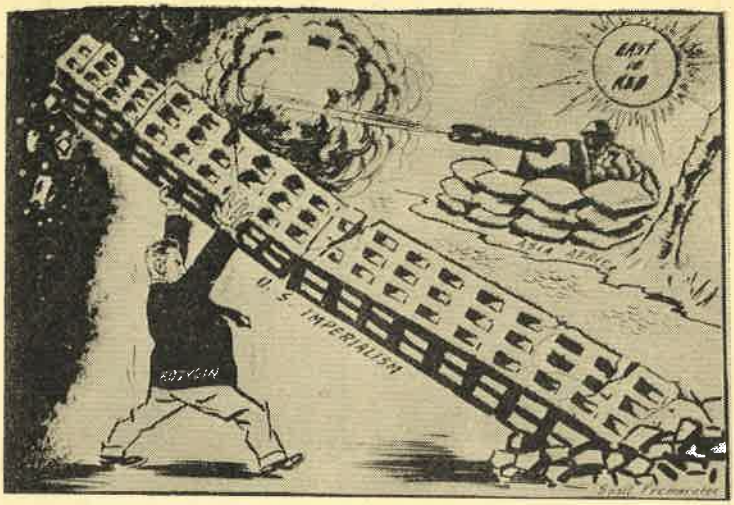
昭和五十三年度の江戸川乱歩賞受賞作である栗本薫の「ぼくらの時代」は一口で言えばムードのみの存在する推理小説である。推理小説のファンをもって自任している私であってみれば、推理小説として読めば物足りないこと夥しい。栗本薫自身「著者のことば」の中で、「私の書いたものは、論理的でも、緻密でもありません」とはっきり認めた上で、「私はミステリーの、論理と緻密さ以外のあらゆるものが好きでたまりませんでした。雰囲気も、オドロオドロも、密室も、ダイイング・メッセージも、そして何より名探偵の謎とき!」とやや聞き直り気味に断わっている。しかし元来「名探偵の謎とき」というものは「論理と緻密さ」を抜きにしては成立し得ないものであること、言うまでもない。推理小説としてのこの作品の出来栄えを論ずるのはここでの私の目的ではないので控えるが、乱歩賞選考委員達の選評も「若い世代のムード」しか誉めていない。陳舜臣曰く、「私が感動したのは、この世代の作家が、ついに自分たちのことばで、自分たちの小説をかきはじめた、という事実であった」。権田萬治曰く、「語り手にも登場人物にも若い世代のみずみずしい新鮮な感覚があふれていて楽しめた」。仁木曰子曰く、「ユーモラスな中に若い世代の悲しみや怒りも感じさせる。なんといっても若い人でなければ出せないみずみずしさが印象的だった」。若い世代若い世代と持ち上げられてはいるが、ここに描かれている若い世代なるものはそれほど素晴しいものなのであろうか。

例えば作品の終わり近くで名探偵役の薫クンの語る次のようなセリフがある。「ヤング、ヤングって、おとなはまるでヤング全盛、ヤングが王様、おとなの場所なんかありはしない、みたいなことをいう。けど、そのなかで、ガキである、ってことは、だんだん哀しいことになってるんです。——ものを知らない、なにもじぶんのものを持ってない、考えかた、感じかた、生きかた、順応のしかたの根本的な原則がわかっていない、おとながみればすぐにそのプロセスがわかっちまうような思考過程しかもっていない——子どもをみていると、わかるでしょう。本一冊よめば、その本が全世界で、他にその本よんだヤツがいたりすると、すごく驚いたりしてる。ひとのいうこと、ストレートにのみこんじまって、おうむがえしで自分の考えにしちゃったりね。こういうことはみ



二つの顔のビグミー

んな別にわるいことでも、ほめられるべきことでもないただあたりまえの、ガキがガキであること――だったんです」。なんと哀れな弱音を吐くものかな。実態がこうであるとするならば、十数年前に石堂淑郎が切歯扼腕した高校生達のそれと何ら変わっていない。若い世代というのはそれほど哀れな存在でしかないのであろうか。他から手厳しく批判されればヘナヘナと腰砕けになり、それに対して反撃し反撥し、或いは自らの弱点を克服しようと努めないものであろうか。ここに表白されている泣き言のような存在を私は若い世代の特長だなどとは認めたくない。「おとなの目には、あんなアホみたいなペチャペチャ声のカワイコちゃん歌手――男のくせにピンクのブラウスなんかきて――またそいつにキーキーさわぐなんていうブタ娘どもだ、ってことにしか、ならないでしょうね。しかし、あのコたちは、他になんにもないんです。ホントに、なんにもないんです。アタマだってよかない、成積わるいし、顔やスタイルにちょっとばかし自信あったって、あのていどのコならごまんといるんです。じぶんもいつかスターになって、てな夢をもつにもあのコたちはこれまでの十五年でもう現実的にならなきゃ生きていけないってことを覚えさせられちまってるんです」。「あのコたちには、他に考えるべきこと、考えて



倒壊する「力」の柱

いいことが思いつかなかっただけです」。キャーキャー騒いでタレントの周囲にたむろする少女に、現実を変革するだけの可能性など初めから求められない話ではある。(しかし、農村の少女のあの穏やかな微笑こそが天皇制ファシズムを支えていたのだとする谷川雁のひそみにならえば、あの少女達の金切り声こそが日本の現在の支配権力を支えているのだと言えなくもなかろう)。このような少女(少年だって同じことだろう)が大人になれば案外したたかな存在になるかも知れないが、まあしかしそこから出て来るものは大した力にもなるまい。まるで思考力ゼロでしかないようなこのような集団に肩入れしてみても始まるまい。栗本薫の描く泣き言のような世界が「若い世代」であることも確かな事実であろうしそれを認めねばならないことはずい分辛いことなのだがこの作者のようにそれに思い入れよろしく「ぼくらの時代」などという表札を掲げられると少なからず戸惑わざるを得ない。そういう甘ったれた存在ならば徹底的に批判すべきであるのだが、作者自身その中にどっぷりと浸って哀れな泣き言を述べているのだから、何とも救いはない。

あい光彦というアイドル歌手の熱狂的なファンである三人の少女が相次いで奇妙な死を遂げるのだが、その一人が「死」の直前に友だちにかけてきた、「あたし、死

ぬの。赤ちゃんできちゃったの。こんな女のコじゃ、あいくんのお嫁さんにもなれないし」という言葉の情けなさは一体どうだろう。いかに十六歳の少女の言にしてもである。この少女達は悪質な男に引っかかって売春をしているのだが、それにしても何と幼稚で未熟児であることか、と思う。性行為をしておれば妊娠することは大いにありうることであり、売春行為をしていてなおかつアイドル歌手の花嫁となることを夢見るとは、十六歳にしてもおつむの程度が粗末に過ぎよう。このような登場人物達を創り出して得々としている作者も作者である。薫クン達の目の前でこの女学生が、「もしあたしたちが自殺したら、三人も自殺するんだから、どうしてだ――って、警察が調べるでしょ」「そうすると、あたしたちがあ――あんなことしてた、ってのが、わかっちゃうと思うの」という会話を交わすが、そこまで考えが及ぶならどうして前出のような幼稚な行為に走ったりするのだろうかと思えて来る。主人公の薫君は最後にもう一度叫ぶ「ぼくらがガキだから、ですよ！　ぼくらだってガキでしかないんです。りっぱに一本立ちしてじぶんの足でやっていくおとなになれないんです。成人式すぎたって、大学生だって、ガキはガキなんです。だからおなじようなやつらどうし、身をよせあって、アタマ長くして、ぼくらだけしか知らん何かがどこかに――ロックだ、ヤングだってなかにあるような顔をして、くっつきあってるんです」。「ぼくらの時代」というのは、甘えの時代、無思想性、思考力ゼロ、無批判性の時代の代名詞なのであろうか。嗚呼！　ここから出て来る未来のヴィジョンなどは、たかだか知れている。「オレかて――オレかてこれでいろんな理想はあるんやで、オレまだ若いさかいあんまり稼いで来よらへんけど、月々これでやってゆけるか、やってゆけるな、てオレがいうやろ。彼女、はい、云うてうなずきよんねん。努力してみます、云うてにっこり笑うねん。あいつも不自由やろけど頑張ってんなあ、オレかて頑張って頭下げてネクタイしめて、いずれガキでもでけたらオレもおやじや、京都の親にも早いとこ孫ォ抱かしてやりたいし、人並みに家建てよるまで、もうひとふんばりやなあ――て、おまえ、それでようやっと明日のために今日も頑張ろって気ィが出るんやないか」「ぼくらの気持」。これは大学卒業後、出版社の編集部にはいり、少女マンガ雑誌の編集に携わって一年経つ青年の述懐である。結婚して、子どもをつくって、親にその子どもを抱かして、そして家を建てる。このマイホーム主義。小市民主義。このような生活実践が容易であるとは決して私は思わないが、しかし若者の抱くヴィジョン

としてはいかにも貧弱に過ぎよう。状況と自らの緊張した対立関係などはここには全く存在しないのである。これでは推理小説の本来の性格である筈の気の利いた人殺しなどできよう筈がないではないか。このような甘え切った、或いは開き直った、世代弁護論などはこの辺りで願い下げにしたいものである。

3

精神病理学者・此木啓吾は、最近の若い世代の精神構造を分析して、「モラトリアム人間」と定義したそうであるが、この「モラトリアム人間」というのは川本三郎(『モラトリアム時代』の文学」)によると、いつまでたっても学生気分の抜けない若者たちの謂であるようである。学生を若さの横溢した権力への反逆の時代と考えれば、「学生気分の抜けない若者たち」というのもあながち悪いものではないように思えるが、この「モラトリアム人間」というのは決してそのような積極的な存在ではなく、自分の若さや自分の甘さを常に相対化することなく、従って、自我・自意識を他人の視線にさらしながら自分のものに鍛えあげて行くことができない、二十歳をとっくに過ぎていてもいまだに学生気分のまま「僕」「ぼく」と成長をストップさせている、自意識も自我も持ちようのない青年のことだそうである。成程そう言えば先の栗本薫の作品の登場人物達の多くがそうであったし卒業論文の提出〆切を延ばしてもらおうと思って親しくしていた担当の教授に金槌で傷を負わせたK学院大学の学生などもその行為の短絡さ加減から見てさしずめその典型的なタイプであったのかも知れない。このような青年にとっては、確かに未来は現在の対立物としてあるわけでもなく、現実は自分の対立物として存在しているわけでもない。どだい最初から、状況と自分との対立といった認識などはあり得ず、弁証法的思考などからは縁遠い「ボクちゃん」的存在でしかないのである。三田誠広、高橋三千綱といった芥川賞受賞作家が共にこのタイプに属しているようなのは興味深い事柄である。

川本三郎は高橋三千綱「九月の空」について、「庄司薫の〃薫くん〃、三田誠広の〃僕〃と同じ、可愛らしくも自閉的な男の子〃勇くん〃が主人公で、ここにはおよそダイアローグというものがない。人と人との親密なかかわりは、無意識のうちに避けられている。『九月の空』には、主人公の勇くんのほかにも何人か登場人物がいるがどれも『人間』というよりは『風景』といったほうがいい勇くんはなぜか女の子たちにもてるのだが、面白いこと

に、この女の子たちはいつもきまって『むこうからやってくる』。同級生の女の子は、勇くんの練習を待ち受けて声をかけてくるし、小学校の幼なじみのグラマーな女の子もやはり、勇くんが雨やどりをしている時に声をかけてくる。勇くんは人間関係においてあくまでも受け身なのだ。決して彼のほうから女の子に積極的にかかわろうとしない。女の子のほうが声をかけてくるから、仕方なしにつきあう、きわめて受動的な男の子なのである」と分析をした上で、ここには「甘やいだモラトリアム気分が見られる」と指摘している。そして「密室のなかに自閉して、モラトリアム気分に安んじているのではなく、多少とも、その稀薄感にいらだっている点では高橋三千綱のほうが三田誠広よりも面白い存在」であるが、しかし「他者と出会えない限り（他者から傷を受けることもない限り）、稀薄感　そこからの脱出としてのひとり旅↓稀薄感、のくりかえしの毎日しかありえない」と断定する。私は川本三郎のこの指摘に賛成である。逃避をしか意味しない現実の学生諸君のこのような「ひとり旅」（或いはこれに類する「冒険」）に対して私はそれを積極的なものとして評価する気には決してなれないのだが、現実の世界（高校生の置かれている現在の状況は決してこれ程牧歌調ではあり得ないのだ）と絶対に斬り結ぼうとはしない勇くんのこの健康さに、私は殆んど苦々しい思いをしか抱けないのである。秋山駿との対談（「流動」昭和五十二年十月）の中で高橋三千綱は、「（僕はこの現代社会でヌクヌクと）スクスク生きてきましたよ。誰が何といおうと。これは僕は誇りにしたいですね。なにもつらいことを誇りにしたくないです」と開き直っているが、つらいことをバネにしながら現実を突き破る想像の世界を創り出すことこそが、すぐれた文学的営為なのであろうと私は信じている。外界の重さを重さとして感じず、自己の内面に重さなど内包していない作家に、鋭い批判精神など期待する方が無理と言うものであろうか。しかしこのような、ボクちゃんタイプの健康な優等生的高校生でも書けそうな少年スポーツ小説が芥川賞を受賞することを、私は黙視するわけには行かないのである。

高橋三千綱「九月の空」の軽い世界に比べれば、流石に中上健次「枯木灘」の〈血族〉とも呼ぶべき「濃密な血の共同体の確かな存在」（川本三郎『物語』の根拠『紀州』へ）の重さは有無を言わせぬ力で読者に迫って来る。世評も極めて高く、河出書房新社版の「枯木灘」に付された『枯木灘』文芸時評集」を読んでも江藤淳から桶谷秀昭、柄谷行人に至るまですべてオクターブの高い評価を与えているようである。しかし果たしてそれ程に手放

しで札賛してもよいものだろうかとの疑念が私にはある。文学観の相異と言ってしまえばそれまでだが、私には多くの評者のような読み方には些か低抗を感じる。

この「枯木灘」は長編の散文詩である。リフレイン(反復)の多用性について既に川村二郎(『季刊芸術』昭和五十二年春)が触れ、上野昂志(『カイエ』昭和五十三年七月創刊号)が指摘している通りであるが、これは音楽であって、従って基本的には詩の表現なのである。でなければ小説として読めば冗長に過ぎよう。秋幸(主人公)の異父兄・郁男が包丁を持って押しかけ、母と秋幸を「殺してやる」と喚いたこと、その後で木の枝に縊って自殺したこと、秋幸の実父・浜村龍造(蠅の糞の王)が路地の家に訪ねて来たこと、彼が放火をして回ったという噂のあること、異父姉・美恵の気のふれたことetc、絶えず繰り返し語られる。この反復は「複雑な血のつながり」(単行本・一二二ページ)を表現するには大きな効果を発揮しているのである。その世界は、「その男が父親であること、確かにそれは秋幸には架空の物語同然だった。フサは秋幸が生まれて一年もたたないうちから繁蔵と知りあったはずだった。フサは秋幸を連れて繁蔵と逢引した。まめを繁蔵がかみくだいて秋幸に食べさせた、と言った(略)フサの連れ子として繁蔵と文昭と一緒に暮らし、秋幸は小学五年まで繁蔵とフサの間に入って眠った。この家は昔のことは水に流した繁蔵とフサとその二人の子が、それぞれの昔からまもって来たのだった。郁男は何度も包丁や鉄斧を持ってやってきた。洋一の里親で繁蔵の弟の文造は酒を飲んでやってきた。郁男は自殺した。美恵は気がふれた。秋幸一人、無傷だった(一二二ページ)という複雑さと暗さを持った世界である。『わしの子じゃ』男はどなるように言った。『二人共わしの子じゃ』/その時、秋幸は随分昔からその言葉を聴きたいと待っていた気がした。あのアキユキと呼ばれた時からだった秋幸は男を見つめた。男はいた。男はまっすぐ秋幸を見つめ返した。その眼が不快だった。蛇のような眼だった。三歳ではない、秋幸は二十六歳だった。喉元に言葉が這い上ってきた。確かにおまえの子だ、おまえからこの胸も眼も歯も性器も半分ほどもらった、だがその半分が嫌だ。男は町で秋幸を見ていた。それは秋幸を見ているのではない、半分ほどの自分を見ているのだ。秋幸は男を消してしまいたかった。男を殴りつけたかった。さと子のように酒に酔っているのなら、男を、膳をどび越えて殴りつけたかも知れなかった」(一四四ページ)との暗い宿縁の父子関係を持ち、更に、「秋幸は、『二人の子同士で寝てしもた』と言った。/男は秋幸を見た。/『知っとる』

男は言った。『しようないわい』男はこころもち怒ったような声で言った」(一四五ページ)という、異母兄妹とも知らずに性行為を持った秋幸とさと子の暗い関係が語られる。しかしこの近親相姦はまだ悲劇のピークではなかったのである。「路地から高台へ駆け上った男、火つけからライオンズクラブに入るまで駆け上った男は嘲われ、憎まれる。路地の者はその男を許さない」(二一五ページ)。「定かでない祖先を持ち出して語り、どこの馬の骨か分からぬのにと嘲われ、三人の女を同時に孕ませたこの男」(二四九ページ)。「その男とその家族と、男の家族が石に供物をそなえ送る死んだ者に侮辱された気がした」(二四三ページ)。このような呪われた世界にありながら、秋幸には土と取り組んで労働することによって自浄作用が働くのである。「日にさらされ、日にあぶられ、人間の手におえない土に向かって秋幸ら土方が祈りをあげている気がした」(一六九ページ)。「何も考えずに型板を図面通りにつくり、何ひとつ祈りも感謝の言葉も考えず風景に身を染める。季節に身を染めた」(同)。これら肉体労働の人間的な美しいイメージを私達はもっと高く評価すべきである。この点について殆んど言及されていないのは残念である。お盆の後、川原に精霊を送りにやって来て秀雄と争うハメになった秋幸は遂にこの異母弟を石で殴り殺すという悲劇のクライマックスを迎えるのだが、毛早や物語のそのような展開などはどうでもよいことなのである。

それよりも、いまこのような血縁関係のどろどろと沈潜した世界の中に何故わけ入って行かなければならないのかが私にはどうしても疑問として残る。柄谷行人は『東京新聞』文芸時評(昭和五十二年五月二十七日)に於て「枯木灘」は「いわば人類学的対象そのものである」などとわかったようでわからない概念を持ち出した上で、「中上氏はおそらくより内向的な作家として徹底し、あたかも〝私〟そのものが破壊されたかのような逆説的相貌をもってあらわれたのである」と賛辞を呈しているがこのような血縁の世界に沈潜して行くことによって果たして〝私〟そのものが破壊されようか。私には思えない端折って言えば、〝私〟そのものを破壊するためには、やはり、このような現実を変革して行くとの確かな意図を持った人間の、そのための自己変革の闘いのプロセスを丹念に描き切る作業をもってしかなし得まいと私は思うのである。

最後に「枯木灘」の表現上の不備を幾つか指摘しておきたい。凝りに凝った文章・文体の故にであろうが時制の混乱、読み辛さの箇所が多く、それは一々挙げないで

おく。

腹の大きさをかくすためか赤のストライプが入った妊婦服を着た美智子はどう見ても十八歳以上には見えないせいぜい十九歳までだった」。(四〇ページ)おかしな書き方である。「せいぜい十九歳までだった」の部分は不要であろう。

「それから丁度四時間後、風呂に入り飯を食べ、家にいた秋幸にその五郎が、車を壊され、殴られて半殺しの目にあい血だらけになっていると、姉の美恵から電話が入った」。(五三ページ)主語・述語の関係、修飾語・被修飾語の関係をもっと整理しないと、一読すんなりとは理解し難い。

「カーキ色のズボン、カーキ色の上衣をいつも着た大きな体の男は、今、軍隊から脱走してきたばかりのように思った」(一九〇ページ)。「思った」の主格が不明である。構文上は「大きな体の男」であろうが、それでは意味の上ですっきりしない。とにかく読み辛い作品ではある。

(文学部助教授・よしだ　ながひろ)

日本の大学生とドイツの大学生について

D・シャウベッカー

日本の大学で教える外国人が日本の大学と学生をどう思うか、またB・R・D（ドイツ連邦共和国）側の見方について何か書くようにといわれたので、これからB・R・Dの大学と学生について幾つか紹介してみようと思う。

経験や印象による偶然性を帯びた比べ方のかわりに、危険性の少ない統計を使って、ドイツ語圏の大学一般にふれB・R・Dの教育組織、それに大学と学生のここ15年間の傾向問題にふれてみたい。日本との比較にもなるB・R・Dの客観的な情報に重点を置いたのは、それに当たる日本の情報については、皆もう周知のことだと考えたからだ。

ドイツ語を話す国々は次のとうりである。

B・R・D　面積 249 km²（ほぼ本州と四国の面積）
人口 6,100万人（日本の人口の約半分強）

D・D・R　面積 108 km²（ほぼ北海道と四国の面積）
人口 1,700万人

スイス　面積 41.288 km²（ほぼ九州の面積）
人口 600万人

オーストリア　面積 83.850 km²（九州の約2倍の面積）

1978年、日本では443の大学に約186万人の学生がいた（同年令の22％）。また436の短期大学には約38万人の学生がいた（同年令の8％）。さてB・R・Dでは、98の大学に約75万7千人の学生がおり（同年令の18％）、その98の

大学の内わけは次のとおりである。

総合大学 (Universität) 37大学

教育大学 (Päeagogishe Hochschule) 28大学

新・旧別の神学大学 (Theologische Hochschule) 10大学

専門大学 (Gesamthochschule) 8大学

工業専門大学、工業大学 (Technische Hochschule, Technische Univerersität) 7大学

医科大学 (Medizinische Hochschule) 3大学

獣医科大学 (Tierärgtliche Hochshule) 1大学

上記の98の大学に加えて、26の芸術大学 (Kunsthochschule) があり、約2万人の学生がいる(同年令の0.3%)。また160の高等専門学校 (Fachhochschule) があって、これは1970年まで (Ingenieurakademie) と呼ばれていたものだが、約17万人の学生がいた(同年令の8%)。

D・D・R　53大学(その内47大学が専門学校)

学生数140万人(1万人につき81.2人)

オーストリア　総合大学 (Universität) 12

芸術大学 (Kunsthochschue) 6

学生総数　12万人

スイス　総合大学 (Universität) 7

専門大学 (Fachhochschule) 4

このうち6つの大学はドイツ語を標準語とする。

学生総数6万人

D・D・Rとオーストラリアは、文化ならびに教育上の政策として、日本の文部省にあたるような中央的なものを追求しているが、B・R・Dとスイスでは大学生までの教育機関はすべて直接、州 (Land, Kanton) の政府に附属している。B・R・Dの場合、一九七二年に連邦議会で決められた大学の枠を決定する法律が、地方の分化上の自治権を侵すのではないかと討論されている。

日本では私立大学が重要な役を果たしているのに対してドイツ語圏の国々には私立大学がない。神学大学は半公立である。B・R・Dでは原則として、幾つかの私立高等学校を除いて、教育費はいらない。

B・R・Dの大学の半数以上がここ15年間に一度に設立された。B・R・Dにある最も古い大学は、Koeln と Heidelberg に創られたが、これらはシスマの時期にローマ向きの政策を強固にするためであった。15世紀から17世紀にかけて当時あった宗教改革とそれに対する旧教

○ 大 学
● 工業大学
⊘ 専門大学
□ 医科大学
△ 獣医科大学
✚ 新教大学
⊞ 旧教大学
大 学
(教育大学無)
Kiel
Lübeck
Hamburg
Oldenburg
Bremen
Osnabrück
Hannover
Braunschweig
Berlin(West)
Münster
Bielefeld
Bethel
Clausthal
Essen
Bochum
Dortmund
Duisburg
Hagen
(Fernuniversität)
Paderborn
Göttingen
Wuppertal
Düsseldorf
Kassel
Siegen
Köln
Aachen
Marburg
Bonn
Gießen
Fulda
Oberursel-
Königstein
Frankfurt
Mainz
Würzburg
Bayreuth
Trier
Trier-
-Kaiserslautern
Darmstadt
Bamberg
Mannheim
Neuendettelsau
Erlangen-Nürnberg
Saarbrücken
Heidelberg
Regensburg
Karlsruhe
Stuttgart
Eichstätt
Hohenheim
Passau
Ulm
Tübingen
Augsburg
München
Freiburg i. Br.
Konstanz
0 50 100 150 200km

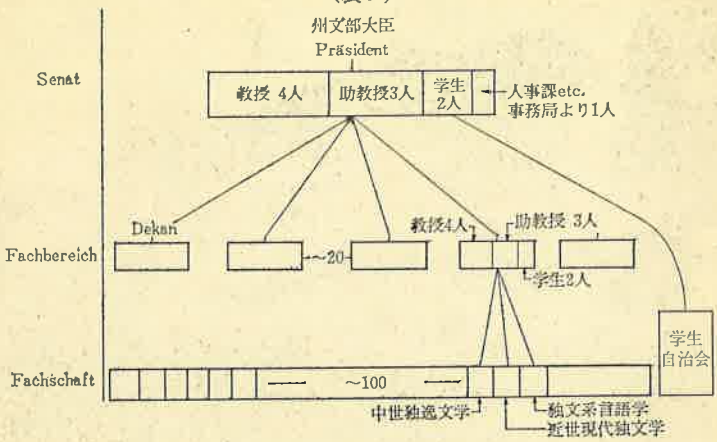
Tübingen 大学（学生数ほぼ2万人）の一部.
1479年に建てられ，学生寮として使用　（写真1）

の運動という南北の対立の中で、領主たちが彼等の独立性を主張する方法として、また新しく大学が創られた。〔写真1〕 18世紀になって絶対主義の領主たちがまた新しい大学を創り始め、これが大学創立の第3番目の時期であった。ベーコンの思想がドイツにはいってきたことで、自然科学を中心にした大学と啓蒙主義による大学附属の病院が生まれた。19世紀にはいって、教育・教養そして研究の統一を主張する理想主義（フンボルト）の大学が生まれた。

第2次大戦後、産業と産業社会の要求に応えようとして大学の組織を変えたり、大学の数を非常に増したりしたことは、第5期といえる。〔写真2〕建築様式から講義内容まで、創立時代や州によって違いが大きい。小さな町の中ぞ、大学を点々と幾つかの建物に分けたところもあれば工場と呼べそうなコンクリートの塊になった大学もある。中世または近世から続いてきた学部の伝統、例えばゲッティンゲン理科系の大きな学部、マールブルクの新教派の伝統、ミュンヘンの哲学に於ける旧教派の濃い要素（今でも新しい教授を呼ぶ時、司教の意見を見過してはならない）があるが、教師の転校が多いため、学派といったものは長く続かない。

8つの州 (Land) ベルソン府、ハンブルク府、そして

（表２）



日本にある学部の大学組織をやめて、約20のFachbereich（いくつかの「専門科」が附属する「範囲」）による大学組織が70年代ふえてきた。

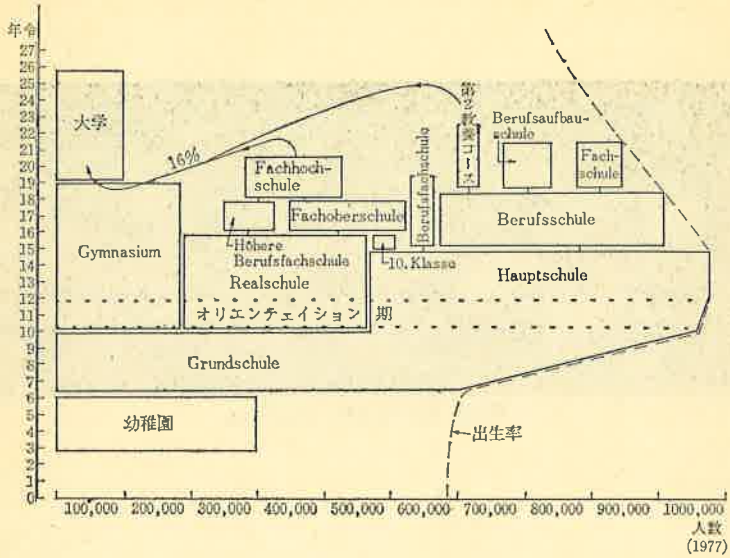
ブレーメン府では、CDU（キリスト教民主同盟）、FDP（自由民主党）、それからSPD（ドイツ社会党）のうちのどの党が強いかによって、大学の組織、例えば学生の会議参加権（1/3～1/5）と投票権なども変れる。〔表２参照〕SPDの強い、いわゆる「赤い大学」と呼ばれるブレーメン、西ベルリン、フランクフルト、マールベルク、それにハイデルベルクの大学の学生の共同決定権が強いのに対して、バイエルン州やヴェストファーレン州の大学では、人事のことにまで及ぶ学生からの影響力が比較的うすい。

大学のあいだにこの様な相違があるが、学問的水準には各々の教師による違いが当然あるにしても、さほど変わりはなく、同じだと考えられているから、日本にあるような就職にまで影響を及ぼすほどの学校差はない。大学に残ったり、医学部などその世界で昇進するには、博士論文の指導教授の「コネ」が必要だといわれている。その他は、就職に関して、大学と教授はいっさいかかわらない。それは大学にまったく関係のない私的なことと考えられているからだ。

B・R・Dの学生の進学と生活について話を進める前に、一般的な教育機関についてまず説明をしておこう。

B・R・Dの3～5才の幼児の約50％〔一九七七年〕が幼

（表３）



稚園に通う（日本では60％）。日本の５才児においてその90％が幼稚園に通うが、ドイツではそれほど高くない。ドイツではすべての主婦の42.8％が仕事を持ち、６才までの子供を持った母親のうち⅓が現在働いているため、保育所の数が増えてきた。学生結婚の率が18％と高くなるにつれて、大学内にも保育所がつくられるようになった権威に基づく教育に対して、子供個人の要求を尊重するアメリカ系（スポック博士）の教育方法が50年代から始まりつつあったが―それが後に学生紛争を起こすもとになったのだとも言われているが―それは子供を孤独にしてしまう教育方法であるからと、60年代半ば頃になると、今度は子供の魂とその集団心理的反応に任せるという、東側の考え方（Reich）に近寄ることになった。この頃から学生達による共同体（Kommune）が始まった。

学校に上ってから15才まで同じ一般教育を受ける、アングロ・アメリカ系の日本の教育制度―D・D・Rとオーストラリアも同様である―と異なって、B・R・Dの生徒は６才から10才まで、まず Grundschule という４年制の学校を経て、それから３つの異なるコースに進む。

① Hauptschule：Grundschule を出た半数以上の生徒が〔表３参照〕、普通 Grundschule と同じ建物にあるこの Hauptschule に通って、英語を含めた５年間の一

Ruhr 大学の文学，社会学部

般教育を受ける。平均15才で卒業し、そのうち半数足らずが、会社や工場などで2、3年の専門訓練を受け、Deutsche Handelskammer（ドイツ商業議会）に属する全国の総合経済機関の監督する試験を受ける。男性の多い職種は、自動車整備工(10.8%)、電気工(9.8%)、機械工(5.7%)、それに塗装工(3.2%)、女性の場合、店員(11.6%)、美容師(10.4%)、販売事務員(8.4%)、医事補佐(6.9%)である。〔一九七六年〕また Hauptschule を出た¼の生徒はこの訓練を受けないまま働きに出る。両者は共に、18才までに一般教育と専門科目に分かれた専門学校(Berufsschule)に通う義務がある。また Haoptschule を出た残りの¼は、高等専門学校(Fachhochschule)などへ進学する。

② Realschule : Grundschule を終え10才の生徒のうち30%以上が、主に事務職に必要な知識を中心にした教育を6年間受ける。例えば外国語の科目としては、文学よりも商業英語やフランス語を習う。そして卒業生は会社の係長クラス銀行員、それに支店長補佐というキャリアに進む。また、ここの卒業生のうち約15%が高等専門学校(Fachhochschule)に進学する。

① Hauptschule と② Realschule の卒業生の16%が、10数年前に生まれた第2次教養コース（これから説明す

るギムナジウムを経なくても、同様の大学進学資格を得ることのできるコース)を通って大学まで進んでいる。

③Gymnasium 残りの20%足らずの10才の生徒は、古典語系(ラテン・ギリシャ語)、現代語系(英・仏語)そして現科系に分かれた9年制のGymnasiumに通う。ここの卒業試験(Abitur, Matur)を通って大学へ進み、これを終了した者は、いわゆるアカデミックな職業や指導的地位への糸口を得る。

これら3つの種類の学校は普通50分単位の授業で、午前8時から始って正午に終る。毎週一回程度集まるスポーツや音楽のクラブ(日本のように義務的ではない)を除いて、学校関係のクラぶ活動はない。午後2、3時間程度の宿題の前後に、15才までの子供の⅓以下が、週に1～2回、Deutscher Sport Verband(ドイツ・スポーツ連盟)の活動に参加する。男子の好きなスポーツは①サッカー②器械体操③水泳、女子は①器械体操②水泳③陸上競技である。4、5年前から流行してきた矛道、合気道、空手などに通う子供も増えてきた。多くの若者が、この頃よくある教会附属の青少年センターで、キリスト教的雰囲気の薄い討論をしたり、ピンポンやダンスを楽しむ。テレビの前で時間をつぶす子供が増えているにもかかわらず、将来の仕事に役立つであろう趣味を持っている子供は、日本に比べるとまだまだ多い。

学費と教材費は無料だが、それにもかかわらず、わずか20%の親しか子供を大学への入口であるGymnasiumに行かせない理由として、大学を卒業するまでの15・6年間の生活費(学生の一ヵ月の最低生活費は638マルク)を払う必要と、10才では子供の将来の能力はわからないというリスクがあるからだ。大学を中退する者の率は20%と高い。(日本は6%)また日本の4人に1人という留年率に比べて、ドイツでは1年半程在学期間を延長するのはごく普通である。しかし、根本的な意識、つまり「労働者の子供は大学へ行かなくてよい」といった社会的区別を10才の子供に与えてしまう親の意識が大きい。またその裏には、開放的になったはずのGymnasiumの組織や雰囲気が、実はまだそうではないという事情もある。一九六六、六七年の大学から始まって教育全般に広がった改革運動によって、Gymnasiumの閉鎖的な性格は確かにわずかながら緩和された。労働者階級の家庭出身の学生数が4%(一九五二年)から18%(一九七五年)に増えた。また逆に、金持ちでなければ子供を入学させてもらえない程学費の高い私立のGymnasiumがここ4、5年ふえてきたことは、同様の現由からだと思う。

大学生の勉強の仕方とその生活について、次に話して

みよう。B・R・Dの大学には教養部というものはなく、学生は一科目を中心にした三科目を選択し、一週に単位から25単位づつ、4、5年で学業を終えるはずになっている。しかし、統計によると、平均6年半で大学を出るようだ。自然科学、社会科学系は、人文科学系に比べて必須科目と、決められたカリキュラムに合わせた試験の数が多く、はっきりしている。教師になろうとする学生の必須科目は教育学あるいは心理学で、英文学・独文学などの学生には中世の文献学のセミナーが必須科目としてあるが、学年次ごとの進級などというものがないから、日本に比べるとすべてがばらばらである。点数制度や出席簿がないかわりに、多くの場合、グループ発表という形で参加する。文学部では一つ一つの科目ごとに落ちる、通るなどということはほとんどない。

先に述べた20%の退学率、あるいは23%の転科率のうち大学に入ったものの、何を選んで将来どうするかまったくわからず、フラフラしている学生の数が多い。Würzburg大学の一九七九年度の調査によると、在学生の15～20%が心理治療を受けており、その内の78%の現由が学業困難であった。卒業試験に対する恐怖感からくる学生の異常心理状態もかなり多い。心理治療に通う2番目の現由が人間関係の問題、特に孤独感であることは、内にひきこもってしまった新入生が多くいるように思われる明るいテーマに移ると、クラス制度、クラブ活動、先輩・後輩といったものや、コンパのないB・R・Dの学生は、夜になると飲み屋に行くことが多い。学部別、イデオロギー別の巣になっている飲み屋に通う学生が非常に多い。またその⅓が女子学生である。在学者の女子率はB・R・Dでは⅓以上、日本は、¼以下、また日本の修士の女子率は4%、博士は8%、これに対してB・R・Dの博士号をとる女子の数は、全体の5%である。〔一九七八年〕

B・R・Dにはパチンコ屋というものがないから、パチンコ台の置いてある飲み屋には、神学や心理学の学生が集まる。飲み屋には、トランプやサイコロも置いてあるが講議の内容についてまじめな討論を続ける学生も多く、飲み屋が教室の延長になる場合がある。

学生の内50%は平均2間のアパートに住み、20%は親もとで、そして12%は学生寮にはいる。親元に暮らす学生や、18%の下宿人のうち大半が、学生が共同体(Kommune)で借りている家や、借りきったアパートの一階に住むことを望んでいる。田舎の安い家を借りる学生も多い。

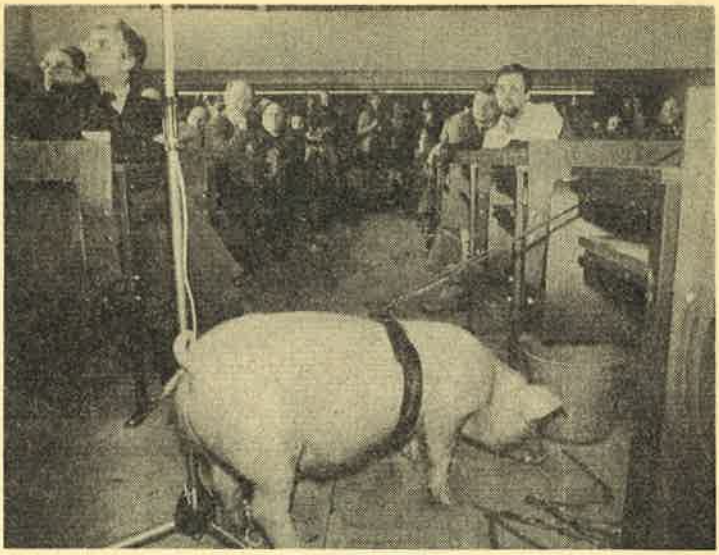
一九七六年度の調査によると、平均最低家賃や下宿代は160マルク、飲食費205マルク、そしてさっき述べたよ

就職浪人(教師になりたいけれど…)

うに学生の一カ月の最低生活費は638マルク、これらを全面的にまた部分的に仕送りする親は全体の50%である39%の学生が就職問題が解決すれば返すという条件で、あるいはこの条件なしに、国家から金をもらっている。国から援助を受けている、Gymnasium から大学までの計約90万人のうち大学生はで、そのうちの約20万人が、一カ月に5万5千マルクの援助を受けている。

最後に、70年代に生まれたB・R・Dの大学の学生定員限定制度(numerus clausus)という新しい問題についてふれる必要がある。

15年前の同年令の大学生率6%が今日18%にまで伸びたにもかかわかず、大学の数や設備はそれについて行けず、理科系、社会学系志望の学生約5万人は、2、3年間入学を待たなければならない。入学する順番は、Gymnasium を卒業する時の試験(Abitur)の成積が決める。全国の志望者の成積は中央のコンピューター・センターに記録されており、それによって、Gymnasium の親を含めた受験競争が激しくなってきている。この受験競争がB・R・Dでは大学に入学してからも続く現由は、就職に優秀な成積が必要になるからである。一九七六年度、就職できなかった卒理生の率は31%で、アカデミックなプロレタリアートといった恐ろしい言葉も流行している。



Frankfurt 大学学長就任挨拶　ブタの方が…（学生の反応）

学生率のピークは一九八三年になると見込まれている。〔表2参照〕それに伴って学生の共同決定権はどんどん弱いものになり、学生紛争以前の状態に戻りつつある大学が増えてきたという事実は、政治の全国的な右への非常に強い傾向を裏づけている。

一九五〇年代から六〇年代半ば頃までの学生の懐疑的な態度、66年から72年までの、紛争という形ではっきりと反発した時代、そしてその紛争が失敗に終わり結局学生の力は弱いと覚悟した現実的な今の世代という。この3つの時期が、今日までのB・R・Dの流れである。

一九七五、七六年になるとSpontigruppeと呼ばれる集団が生まれ―「やけどをした犬は火を恐れる」のか―決められた計画、組織にあてはまらないまま、反対すべき教授の講演や政治的な話には耳をかさず、積極的な提案もせず、笑いながら自分の意見をまくしたててはまた解散していくといった事が多く起きるようになってきた。この連中がどんな言葉を使うかというと、あるSpontigruppeの作ったメニューを見れば、「マルクス・ソース」、「理論揚げ」「現実盛り合せ」「解放だんご」といった妙な言葉が並んでいる。それはいったいあきらめの言葉か、それとも武器なのだろうか？

（文学部独文科助教授）

——書評——

「ユースカルチャー史」批判

竹内洋

日本の近代化はヨーロッパの三倍のスピードで進んできた。ヨーロッパが三〇〇年かかったところを一〇〇年で走ったのである。そして戦後、年平均一〇%に近い経済成長をつづけた。日本は並はずれた社会変動をしているわけでこのような社会では世代ギャップの問題がもっとも鋭くなる。人間形成期における「自明性の世界」Wbrld-taken for-granted. が世代によって大きくくいちがうからである。

だから、戦中派はいう。「オレたちは腹がへって死ぬかもしれないという恐怖をかかえた世代である。しかるに、やつら(若者)は食いすぎて死ぬかもしれないという恐怖をかかえた世代なのだ」とか、「若者は外国人と思え」とそして、常識(犬が人を噛む)はニュースにならなく風変りなこと(人が犬を噛む)がニュースになりやすいので、世代間の連続性よりも断絶性がニュースでないし「問題」Problem として飛び交う。しかも日本は世界に名だたる情報好み社会である。

余談ながら、電々公社はこの二五年間に事業にして二〇倍の驚異の成長を遂げた。そこに企業努力を認めないわけにはいかないが、日本人の情報好み的体質(この一億うわさのチャンネル的体質!)、と適合したからではなかろうか。

閑話休題。そうすると、そこに社会学者マートンのいう「予言の自己成就」(self-fulfilling praphecy) の力

学が働く。世代間のギャップを強調する情報にばかり接していれば、話がつうじないという「状況の定義」(definition of the situation) をつくらせてしまう。そのような「状況の定義」をすればするほど現実はその方向に動き、世代間は当初より拡大する。こういう循環が繰りかえされる。その結果、「わかりあえる」世代の幅はぐんぐんせばまり、いまやこうなる。留年生の五回生や六回生ともなると、「花」の一回生からは「オジン」というレッテルがはられ、「オジン」は「いまの一回生はわからん」とやりかえす。

世代間ギャップをいたずらに強調するのはすくなくとも私の好みではない。わからない「あいつら」を設定することによって、自分たちの希薄なアイデンティティーを埋めあわせようとするさもしい精神といえなくもないからである。そして、それは「変わり者」をフレイム・アップによって犠牲の羊にし、仲間の団結(!)をかためる日本人のあの排他主義と無縁ではないのだから。

その意味で、青年論は連続性と断絶性の両方の目くばりが必要であろう。青年を歴史的系譜のなかで位置づける作業が大切であるとおもう。

青年についての論説は近年大変な量に達している。しかし青年について論ずる社会学者や社会心理学者はあたらしもの好きな人が多く、歴史的な系譜のなかで現代の青年文化を位置づけてみようとする人々はほとんどいなかった。

いたずらに現代青年の新しさだけを追い求める、フーガ的・臭ぎまわり的評論も少くなかった。現代の青年文化といえども過去との連続面が多くあるはずである。「古さ」と「新しさ」がどのように結合して展開しているのかを明らかにすることによってこそ現代の青年文化について深いところから明らかにできるはずである。

本書の著者坂田稔氏は一〇年も前から青年文化に興味を持ち、研究を続けてきた人である。そうであればこそ歴史的研究の重要性を認識するに充分であった。著者は「あとがき」でいう。

「たとえば学園紛争の反抗を欲求不満のせいにしても若者の欲求はいつの時代でもあったのだと、また学園紛争は何もその当時ばかりにあったことではない。このようなことから、ユースカルチュアを歴史的にたどってみようという考え方を持つようになった」(三一三頁)と。こうしてできあがった本書の構成は以下のようになっている。

序　ユースカルチュアについて

1　幕末の志士

2 ―「時代の青年性」が生んだ青年―
開化の青年
―日本的立身出世主義の原型―

3 民権壮士
―明治青年の自我形成過程―

4 ハイカラ
―青年に見る生活文化の変容―

5 帝国学生
―国家による国家のための教育―

6 煩悶青年
―明治文化の停滞によるアノミー―

7 大正青年
―明治を説した社会的性格―

8 市民青年
―教養に自我の充実を求めて―

7 田舎青年
―修養思想とその国家的囲込み―

10 マルクスボーイ
―教養から行動を求めて挫折―

11 モボ・モガ
―大衆社会における青年の解体―

12 青年将校
―個人と国家を貫徹する革新運動―

13 特攻隊
―殉国の死に生きた青年たち―

14 アプレゲール
―敗戦を原体験として生きた青年―

15 六・三制っ子
―戦後民主主義と密着した青年―

16 太陽族
―青年文化の自立とその風俗化―

17 現代っ子
―高度経済成長下における生活文化の変容―

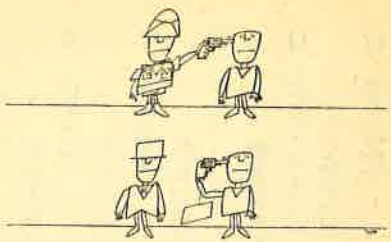
18 新左翼
―自己実現としてのラジカリズム―

19 ヤング
―既成社会から離脱を見せた青少年―

20 ニューヤング
―脱工業社会に生きのびる青少年―

みられるように、幕末から現在までのユースカルチュア史を時代の「典型的青年像」を抽出することによって二〇の青年像にまとめてその系譜を跡付けている。もし本書が歴史家の手でかかれれば、せいぜいが「新左翼」や「ヤング」で息切れしてしまう。「ニューヤング」に

まで筆をのばしているところに青年文化とかかわっている著者の面目躍如たるものがある。著者によれば、「ニューヤング」とはポスト・シラケの青年像で、「既成秩序に進んでコミットするというほどの意識はないが、これに適当に順応し、旧ヤングのユースカルチュアを中途半端でぬるま湯的な日常生活の中に溶かし込んで、生きている」(三一〇頁)ということになる。ここらあたりの著者の分析はやはり冴えている。



上　旧植民地主義
下　新植民地主義

ところが歴史的な青年像の分析にはこのような冴えがみられない。第一にこれまでの思想史の通説にあまりにも従いすぎること。第二に抽出されたそれぞれの青年像をあまりに創発型(emergent type)として処理しすぎて、それぞれの青年像の水面化での連続面の視点が欠如していることに、その原因がある。著者自身「あとがき」でこう語っている。

「ただし、書いていて、最初に持った疑問がわかるようになったとか、ユースカルチュアというものの意味や内容がわかったのかというと、ぜんぜんそうでもない。なかでも時代によるユースカルチュアを描き分けようとして、何やら牽強付会な書き方をしたり、便利な抽象概念で十把一からげにくくるようなやり方になったりしてしまった」(三一四頁)。

これは大変謙虚な自已評である。そうした「わかっている」著者に敢えて苦言をのべるのはいささか辛いけれども、私自身の読後の感想を卒直に言ってしまえば、本書はよくもあしくもユースカルチュア史の百科辞典である。百科辞典は概観には役立っても、それ以上にではないところに特徴がある。知的冒険を抑制していることにも百科辞典の特徴がある。

本書が近代日本史をユースカルチュア史というユニークな視角からみた業績は認めなければならないが、それが精彩を放つには次のような条件が必要だろう。ユニークな視角をとることによってみえてきたことがこれまでの近代日本史の欠落部分を埋めるとか、一部分書き直しをせまるとかのインパクトをあたえることが。

その例として私は尾崎盛光氏の『日本就職史』をあげたい。尾崎氏は、『日本就職史』の「はしがき」のなかでつぎのようにいっている。長文になるが特定のアスペクト

から近代日本史をみるということのインピリケーションを確認しよう。

「いささか飛躍すれば、『就職』という断面を『歴史』という観点から探っていくと、そこに日本資本主義の歩みも見ることができる。同じく日本学生史も、日本教育史も、日本政治史も、大げさにいえば日本文化史も、日本人物史も、改めて考えなおすことができるはずである。

日本就職史をたどるということは、かくしてすこぶる魅力に富んだ作業となるであろう。これは、気の多い、多分に浮気な中年の雑文家にとっては、禁じえぬ魅力である。これを換言すれば、日本就職史を編むことは、一方では、日本資本主義発達史を、日本インテリゲンチャ史を、日本教育制度史を、日本近代階級史を、ときには片目で斜めに、ときには両目を開けて真正面から、にらみすえることである。他方では、もしかしたら、これらの諸断面で歴史が見落としたり見過したりしてきたことを発見できるかも知れない。という期待の上に立つことである。」(傍点引用者)。

この意気やよしではないか。事実、『日本就職史』はこれまでの日本近代史が「見落したり見過したりしてきた」ことを発見し、日本近代史にあらたな光をあてたすぐれた業績である。尾崎氏のこの本はもともと「リクルートメント」誌に連載されたものだが、当時、編集長であった森村稔氏(日本リクルートセンター)から何かの話のついでに、つぎのような話を聞いたことがある。尾崎氏はこの連載をまとめるために、社史をはじめとする厖大な資料をコピーし続けたために、ついに東大の復写機を毀したということである。

本書『ユースカルチュア史』がいささか迫力に欠けるのは、そういう新しい資料の紹介にもとづく大担な仮設提起がみられないからである。わるくいえば、日本近代史の通史から恋愛に関係あるものをチョコチョコ集積すれば恋愛史は書けるし、同じ伝で青年史は書けるのである。そういうユースカルチュア史では、日本教育史にも日本政治史にもなんら、インパクトを与えることができない。

米帝国主義を火刑に

もっとも長年にわたって研究をしている著者であれば多くの資料に目を通しているのであろうと思う。しかるにそれが生かされていないこと、つまりこれまでの日本教育史や日本政治史が、断片的に触れてきた青年像を大きく書きかえる大胆な仮説提起がないことが不満である

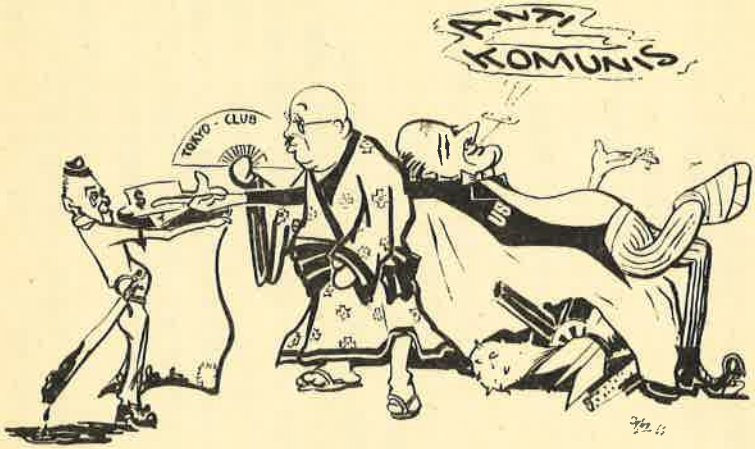
たとえば、「開化の書生」から「民権壮士」への系譜は新たな青年像として語られている。このような系譜づけは、立身青年から政治青年へというこれまでの多方の思想史の認識と軌を一にするものである。だが、果たしてそうだろうか。明治十年代の政治熱は、その以前の立身熱の新たな展開であった、という面がないだろうか。カリフォルニア大学の新進気鋭の日本学者キンモス助教授は、明治の青年の投稿雑誌『顕才新誌』を資料にして、立身熱と政治熱の連続性を論証している(The Self-Made Man in Modern Japanese Thought 1979, unpublished paper)。キンモンス助教授は、明治十年代の政治青年が、税金や地方政治という具体的テーマを避け、ひたすら国会開設論議に熱中し、国会開設が約束されるや否や、何をするかではなく、ただただ国会議員になることを夢みる政治(!)青年であったことを跡づけている。今日の留学生ブームの中で、大学生が何をするかは不問で、ただただアメリカへ行きたいという風潮(?)があるが、それはこのような明治の政治青年と無縁であろうか。ともあれ、この頃の政治小説は、しばしば政治を通じての富貴読書として翻訳され、読まれていたことも付け加えておこう。そのかぎり、明治の始めの富貴のための勉強と、明治十年代の政治熱は同じ類いのものであった、といえる。そうであればこそ、民権運動の退潮期から再び立身熱が生じるのである。

同じことは、「煩悶青年」の抬頭についてもいえる。それは立身青年の陰画像でもあったのだから。この点については拙著『日本人の出世観』においてのべたことがあるので、ここでは繰り返さない。

ところで、立身出世主義について著者は次のように述べている。

「やがて文明開化は、自由民権運動の波に押し流されて消える。国家と青年の短い密月の後、国権と民権の対立が誰の目にも明らかになり、青年の理想は有司専制という強権の前に挫折する。当の啓蒙思想家自身も変節して、民権論を撤回する時期がすぐやってくる。立身出世主義の社会思想的基盤は、こうしてあっさりと消え失せたのである。

しかし、この時期にでき上った立身出世出義は、その基盤を失った後も、長く日本の青年の中に生き続ける。



報　　酬

何故そうなのか。それはちょうど文明開化の時期に輸入された西洋の肉食料理が、日本風に変形されて牛鍋となり、長く民衆に愛し続けられたように、立身出世主義もまた、啓蒙思想のバタ臭い理論が、日本風に調理されたからである。それはすでに泰西の哲学ではなく、日本的モラルとして独り立ちしたものとなっていた。」(二二六頁)

このような認識にもかかわらず、立身出世主義が青年像の転換における連続の論理に充分生かされていないことが残念である。ついでながら、著者は立身出世主義を「啓蒙思想」によってもたらされたと考えているようであるが、これはどうであろうか。立身出世は封建社会の中で抑圧された武士(そして商人)のアスピレーションの開花であって、「啓蒙思想」はその触媒を果たしたにすぎない、というのが私の見解である。そういう見解からすれば、「開化の書生」の副題に「日本的立身出世主義」と書かれてあることが、大変奇妙にみえる。立身出世とは日本人のアスピレーションの独特な形態であるのだから、日本的は余計であろう。日本的義理人情という言葉がないように。

以上はひとつの例にしかすぎない。二〇の抽出された青年像があまりに創発型として描かれている。それぞれの青年像の水面化の連続性の視点がほしかった。

また、著者は随所で、心理学や社会学の概念をつかった歴史解釈をしている。しかし、「いわずもがな」解釈が多い。一つだけ例をあげよう。白樺派の社会的性格について著者はつぎのようにいう。

「このような社会的性格は、当時において際立っていた。それは彼らが明治二〇年前後の生まれであるという世代の問題とともに、都市の上流家庭出身であるという階層の問題も、もちろん無視できない。A・H・マスローは人間行動の動機には一種の階層があって、生理→安全→所属と愛情→自尊→自己実現というようにランクづけているが（Motivation and personality）、当時の多数の青年にとっては、なお生活することが最大の課題であったのに対して、彼らはそれを関心事とせずに、自尊や自己実現を課題として、青年期を出発させることができたわけである」（一一一頁）。

ここでマスローの理論がなぜ必要なのであろうか。また、そうすることによって何がわかったのだろうか。本書で抽出された青年像は「幕末の志士」にしても、「開花の書生」にしても、「民権壮士」にしてもエリート青年であったのだから「自尊や自己実現」が「課題」となったのではないか。「自尊や自己実現」が、ある場合には「立志」にある場合には「立身出世」に、ある場合には「政治」に、ある場合には「文学」にキャナライズされたのは何故か、を明らかにすることが重要なのである心理学や社会学の概念が常識を衒学的に飾ること以上に使われていなく、分析法にまで高められていないことは惜しまれる。

厳しい書評になってしまったが、辛口酒や辛口ドラマが流行する当今のムード（！）に便乗して辛口書評に傾いたわけではない。私自身がこの魅力あるテーマに興味があるぶんだけ自我理想を仮託してしまった、というのが本当であろう。

（社会学部助教授・たけうち　よう）

細見英著

『経済学批判と弁証法』

竹内良知

本学経済学部教授として在任中に夭逝した細見英氏の研究成果が、『経済学批判と弁証法』という題で本にまとめられ、昨秋、未来社から出版された。細見氏は生前、その研究成果を体系化して一冊の著書にまとめる構想をもっていたといわれるが、それを果すことなく短い生涯を終えた。この本は、氏が構想していたプランを基にして、生前に発表された諸論文を、氏の友人たちが編集したものである。その編集については、編者の一人、稲村勲氏が巻末に「編者のことば」として書いているが、それは細見氏の遺志によく添った編集であると言うことができるであろう。

本書は、第一部「マルクスとヘーゲル」、第二部「市民社会批判の展開」、第三部「『資本論』の論理構造」という三部からなり、八篇の論文と「補論」として各部につけ加えられた六篇の論文とを含んでいる。そして、それらの論文はいずれもきわめて高い密度をもった力作であるばかりでなく、全体が一つの緊密な連関をもっていて、著者の一貫した問題意識がすみずみまで行きわたっている。

第一部「ヘーゲルとマルクス」には、「経済学批判と弁証法」という副題がついている。そのことは、この第一部が本書全体のテーマを総括的に扱っている、いわば序論であることを物語っているであろう。細見氏は、「唯物弁証法とは何か、ひいてはマルクス主義とは何か、と

マルクスの顔写真

いう根本問題」を、マルクスとヘーゲルの関係をつうじて解明しようとするのである。マルクスの唯物弁証法とヘーゲルの観念弁証法とは対立と同時に連続をふくんでおり、しかもその連続性そのものが対立をはらんだ連続性である。細見氏は、両者の連続性、共通性の根拠を探って、その根元的同一性のなかに弁証法を生み出す基盤を求めるのである。

氏はまず、ヘーゲル＝マルクス関係についての前世紀末以来の研究論争史を整理して、

(1)観念論か唯物論かを尺度として、両者の断絶を主張する流れ。（スターリン、ミーチン、グロップ）

(2)弁証法ないし疎外論を軸として、両者の連続性を唱える流れ。（新ヘーゲル主義、マルクーゼ）

(3)対立を媒介した連続性、すなわちマルクスによるヘーゲルの「方法」の「逆転」をつうじての継承・止揚の内的構造を解明する流れ。（ルカーチ、梯明秀、ギュンター・ヒルマン）

の三つの流れをとり出し、(1)を客観主義、(2)を主観主義として斥け、それらの一面性を脱してヘーゲル＝マルクス関係の核心に迫るものとして(3)の立場をとり、ルカーチ、梯、ヒルマンに依拠しつつ、これら三者の相互批判をつうじて、三者それぞれがなおふくむ問題点を克服しようとする。氏はルカーチの提起した「歴史過程における主体と客体の弁証法」を、ヒルマンの強調する「実践原理としての方法」の見地に依拠しつつ、梯経済哲学の批判的発展をつうじて、解明することを課題として設定するのである。この課題は、第一部だけでなく、同時にまた本書全体の課題でもある。そして、氏は、マルクスによるヘーゲル弁証法の「逆転」の問題を、抽象的、外面的、形式的に扱うのでなく、市民社会における個人と社会との分裂の問題（「疎外」の問題）についてのヘーゲルとマルクスとの把握の仕方に即して、具体的、内面的、内容的に解明しようとする。「弁証法の〈逆転〉はヘーゲルの市民社会論の批判と止揚とを媒介として可能とな

ったのであり、ヘーゲル市民社会論批判の延長、深化としてマルクスは経済学研究に着手し、経済学批判の完成によってヘーゲル市民社会論批判も完成されたのである。したがって、マルクスによるヘーゲルの方法批判の過程はヘーゲル市民社会論の批判ならびに経済学批判の過程と相互媒介的な同一性にあるはずであって、経済学批判の完成としての『資本論』においてヘーゲル弁証法の〈逆転〉も完成したのである」、と細見氏は書いているが、この点に細見氏のヘーゲル＝マルクス関係の問題への視角の独自性がある。

氏は、この視角から、マルクスのヘーゲル市民社会批判＝経済学批判＝唯物弁証法体系の形成、展開、確立の過程を、『ヘーゲル国法論批判』、『経哲草稿』、『資本論』を中心に究明し、ヘーゲルとマルクスとの対立を明らかにしたのち、ヘーゲルとマルクスとの共通性としての弁証法の根拠を問い、それを両者における「現実的な実践的関係態度」に見出す。氏によれば、「眼前の現実にたいして実践的批判的にたちむかい、現実のなかからイデーを直観的に抽出して、これを現実に対置しつつ、このイデーと現実との媒介、すなわち現実変革の諸契機を現実そのもののなかに追究解明してその実現を志向する理論と実践の苦闘」、「現実にたいする実践的関係態度」こそ、弁証法が意識的な形態で生成する基盤なのである。ヘーゲルは、初期にこの「実践的関係態度」の立場に立ったにもかかわらず、挫折して、「弁証法を〈契機〉としてはらむところの観念的思弁の体系」を打立てることになったのにたいして、マルクスはこの「実践的関係態度」を貫徹することによって、「徹底した実践的弁証法の体系」を確立した。そう細見氏は主張する。

細見氏のこの見解は正しい、と私は思う。なぜなら、弁証法は実践にそのエレメントをもつからである。しかし、細見氏がこの見解の正しさを具体的に解明するためには、初期ヘーゲルの実践的立場とその挫折の過程をあとづけ、ヘーゲルにおける弁証法と思弁との関連をいっそう明確にする必要があったであろう。ヘーゲルにおける弁証法と思弁の関連は、本書においても、マルクスのヘーゲル市民社会批判にしたがって明らかにされてはいる――それはすぐれた成果である――が、その課題のいっそうの解明が未完のままに残されたのは惜しい。その課題が果されていたら、われわれは卓抜なヘーゲル批判をもつことができたであろう。

弁証法成立の根拠の把握は、マルクスの思想と理論との形成・展開・確立の過程の具体的解明の鍵でもある。そして、実践の立場を貫徹したマルクスにあっては、

「ヘーゲルの方法批判の過程と市民社会論ならびに経済学批判の過程とは相互媒介的同一性にあるはずである。」いいかえれば、マルクスにおいては、実践、哲学、科学はいわば「三位一体」的統一をなす。そして、マルクスにおける経済的批判と弁証法との形成過程をその「三位一体性」において具体的に解明することが、細見氏にとって中心の課題である。そして、それが第二部のテーマであろう。

第二部におさめられた五篇の論文のうち、I、II、IIIの三篇は第一部よりも前に書かれたものであり、IV、Vも直接そのテーマを扱ってはいないが、そのいずれもが右の課題と密接につながっていることは明らかである。

第二部「市民社会批判の展開」では『経哲草稿』における「疎外された労働」概念の解明が中心の課題とされている。そして、I「〈疎外された労働〉概念――諸研究の概観と課題の設定」では、『経哲草稿』についての諸研究が、(1)「思想史的視角からの研究」、(2)「『資本論』との方法論的・体系的関連の究明を主眼とする」もの、(3)「『草稿』の経済学的意義・内容を追究する」ものに整理され、(1)ではレーヴィット、マルクーゼの流れをくむ諸研究、ルカーチ、グロップ、(2)では清水正徳、梯明秀両氏、(3)ではローゼンベルク、ヤーン、遊部久蔵教授の研究が検討されて、それぞれの問題点が指摘されている。私は細見氏の見解に賛成であるが、とくに、とくに『経哲草稿』におけるマルクスの思想を「人間学」に解消しようとするレーヴィット等の研究が『草稿』の「疎外された労働」概念の科学的契機を軽視していること、清水氏が『経哲草稿』にフォイエルバッハ的思惟様式をしか見ていないことの指摘にはつよく共感する。そして、(3)の検討をとおして、「疎外された労働」概念の「経済学的意義」を問う研究がなされなければならないという指摘からは大いに教えられた。

II「『ヘーゲル国法論批判』の研究」および、『独仏年誌』の二論文、とくに『ヘーゲル法哲学批判　序説』を念頭において書かれたIII「ヘーゲル市民社会論とマルクス」もまた、「疎外された労働」概念の思想的内容と経済学的意義とを確定するために書かれたのであった。(IIとIIIの成果は第一部に生かされている。)そこから窺われる細見氏の綿密周到な研究態度は敬服に値いする。

IV「『経哲草稿』第一草稿――N・I・ラーピンの紹介」およびV「『経済学・哲学草稿』へ第三草稿――藤野渉先生のお教えを請う」の二篇もまた、「疎外された労働」概念の形成史にかかわる注目すべき重要な論文である。Vにおいては藤野氏の「疎外」概念についての誤っ

た理解が完膚なきまでに批判しつくされている。しかし、「疎外された労働」概念の経済的意義と経済理論的内容を解明するという第二部の課題は、やはり生前には完成しないままに残された。

変革的実践の立場からマルクス主義の論理構造を解明するという細見氏の課題は、しかし、ただ未完のままに残されたのではない。その解明はすでに一定の完成に達していたということができる。氏は第一部において、すでに、素描的にではあるが、『ヘーゲル国法論批判』から『資本論』にいたるまでのマルクス主義（市民社会批判＝経済学批判＝唯物弁証法体系）の形成、確立の過程を内在的に追究し、マルクス主義の論理構造が、現実にたいする「実践的関係態度」の徹底において成立したものであり、その実践的立場のマルクス疎外論による根拠づけと、ブルジョア経済体制の論理構造の把握との相互媒介的な統一の深まり、いいかえれば実践、哲学、科学の「三位一体」的統一の深まりによるものであることを解明しているからである。

細見氏は、『ヘーゲル国法論批判』のなかに、マルクス主義の「自覚的形成」の出発点を見て、そこにマルクスの論理構造が定礎されていることをとらえた。氏は、『ヘーゲル国法論批判』について、「(イ)マルクスもヘーゲルとおなじく、実在的な≪現象の矛盾≫の確認とその止揚の見地から出発する。だが、マルクスは、ヘーゲルのように現象的矛盾を抽象的理念における＜本質的統一に解消することなく、(ロ)現象的矛盾の基底にある＜本質的矛盾＞を分析的に追究し、(ハ)この本質的矛盾の＜必然的＞展開として現象的矛盾を＜解明＞して、(ニ)これによって、矛盾の現実的・実践的な止揚の方向と方策を明らかにしようとする」、と言い、「ここに、実在的矛盾の現象的・実践的止揚の立場に成立するところの現実認識と現実変革の統一的論理、まさしく現実の概念的把握のマルクス的論理構造ともよびうべきものが基本的に定礎されている」と書いている。細見氏が『ヘーゲル国法論批判』における「独自の対象の独自の論理の把握」というマルクスの「真に哲学的な批判」の方法のうちに、「現実の概念的把握のマルクス的論理構造」を見てとったことは卓見である。それは氏の研究のすぐれた成果である。

つぎに、氏は『経哲草稿』のうちに、マルクスの市民社会把握の転回、進化を見て、その中心をなす「疎外された労働」の視点こそマルクス主義的価値論および剰余価値論の展開への基礎視点をなす、と言っている。そして、そこに「実践的変革の立場」（実践）と「労働の疎外」の直観（思想）と疎外条件＝止揚条件の構造的解明（科学）

というマルクス主義の論理体系の三つの要素が定立されたものとして、『経哲草稿』において「政治経済学批判およびブルジョア経済体制批判の論理体系の〈骨子〉」が成立した、と述べている。『経哲草稿』におけるこの「三位一体」的論理構造が確立されるのは、細見氏によれば、労働力範疇の確立によって理論的に確立された「労働の疎外」の過程、すなわち労働過程と価値増殖過程との矛盾が本質的矛盾＝論理的原理として把握され、生産過程の内的構造が解明された『経済学批判要綱』においてである。氏は、マルクス主義の内容把握の鍵を『経済学批判要綱』に見ていたのである。

そして、最後に『資本論』の論理構造が解明される。実践の立場から唯物弁証法体系の形成・確立の過程を解明するという細見氏の課題は、それによって、方法論的内容としては完成に達する。マルクスは現実変革の実践的立場に立ち、この立場を貫くことによってはじめてブルジョア社会の本質的矛盾をまさに本質的矛盾として把握しえたのであり、そしてこの本質矛盾の現象形態・現象形態としてのブルジョア社会の表層を解明した。と同時に、一見したところ、完結的な円環的体系として現象するブルジョア経済体制がその深部、すなわち直接的生産過程においては本質的矛盾の拡大再生産の過程にほかならず、そこにおいて外見上の完結的体系を突破する基盤と条件とを産出し準備している。――氏はそのことを「細見図式」によって究明したのである。

細見氏は『ヘーゲル国法論批判』から『資本論』までの市民社会批判＝経済学批判＝唯物弁証法体系の形成、展開、確立の過程を内在的に追究し、マルクスの弁証法体系の論理構造における実践、哲学、科学の「三位一体」的統一を内容的に首尾一貫して究明することができた。氏は自ら立てた課題を解明し、検証しえたのである。その点からいって、細見氏の研究成果はきわめてすぐれたものである。

第三部「『資本論』の論理構造」は「梯経済哲学批判序説」という副題をもっている。そのことからわかるように、細見氏は自らが獲得してきた唯物弁証法体系の論理構造の把握を、氏がマルクス主義の現代的発展の契機をふくむものとして高く評価する梯明秀氏の経済哲学の批判的解明に適用する。そして、この第三部においては「『資本論』の論理構造」は第一部におけるよりはるかに詳細に展開されている。

細見氏はまず、梯哲学の発展についての粘りづよい内在的分析をつうじて、梯氏の『物質の哲学的概念』における「物質」について、「それは眼前の社会的人間学現

実から思惟的抽象によって抽象された、認識された物質であることを指摘し、梯氏のいう物質は「意識された物質、意識のなかの物質にほかならない。《自然》についても同様。そしてまた、〈物質的主体〉が認識主観であると同時に実践主体であると説かれても、その対象が〈科学的自然〉としての〈世界像〉、意識のなかの対象でしかない以上、そこにいわれる〈実践〉は、いきた生身の人間が自立的生命力と現実的威力をもって自然に迫ってくる対象と否定し否定されながら血と汗で演ずる実践ではありえない。自然そのもの、生きた人間とその実践を論理構成の外におく形式主義的抽象性、認識論主義＝主観主義」と書き、「唯物弁証法の立脚点として強調される〈実践〉がすぐれて意識の実践であり、認識・自覚の過程がそのまま現実の発展過程とされる点……要するに、実践的立場に成立する主体＝客体の弁証法という正しい構想をいだきつつ、その論理的基礎づけの上で認識論主義＝主観主義の一面性におちいっている点」で、梯氏の立場が『歴史と階級意識』におけるルカーチの立場と「まったく軌を一にする」ことを正しく批判している。

ところで、「物質概念」のはらむ重大な欠陥を自覚していた梯氏は、その欠陥の克服という課題を『資本論』の研究によって果そうとする苦闘をつうじて梯経済哲学を形成してきた。細見氏は梯氏の「資本発生の弁証法」をとりあげ、そこには、「直接的生産過程における実在的原理……が、生産手段と生きた労働との対立にのみもとめられ、両者の対立と統一との総体、いいかえれば価値増殖過程と労働過程との対立的統一＝矛盾としてはとらえられていない」という重大な欠陥をはらんでいたにもかかわらず、「直接的生産過程に資本の全運動の原因＝原理を求める着想、ならびに資本主義的生産＝再生産過程の客観的実在的原理と、これによって生みだされつつこれを変革止揚しようとする実践的認識との区別と統一の構想は、『資本論』のみならずマルクス主義一般の論理構造の、すなわち主体と客体との対立と統一の弁証法の解明にとって、きわめて有効かつ示唆にとむものであった」ことを明らかにして、それが戦後の梯経済哲学——梯図式——において、「見事に退化した」ことを指摘している。そして、細見氏はこの「後退」を梯氏における「実践的直観の立場」の挫折によるものと見ている。こうして、「編者のあとがき」で稲村氏が言うように、細見氏においては、マルクスのヘーゲル止揚の鍵と細見氏自身の梯哲学止揚の鍵とはオーバーラップしていたのである。しかし、ここで展開された「『資本論』の論理構造」の理論的肉づけも、今後に残されたままである。

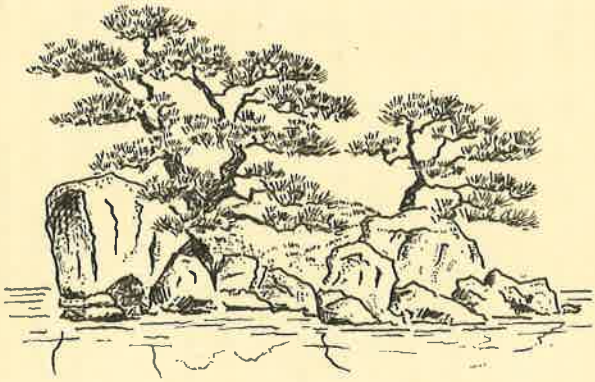
とはいえ、第三部の成果がきわめてすぐれた注目すべきものであることは誰も否定できないであろう。

私は「補論」としておさめられている諸論文には触れることができなかったが、第三部の補論Ⅱからも窺われるように、この本は宇野理論にたいしても、さらには広松渉氏のマルクス理解にたいしても、批判の基礎を与えてくれる。私はこの本をきわめて高く評価し、著者の夭逝を心から惜しむ。私としては、『哲学ノート』におけるレーニンのヘーゲル継承にたいする著者の高い評価について若干の異論をもつが、それはこのすぐれた本の価値にはかかわらない。

（文学部教授・たけうち　よしとも）

関大教授故細見英遺稿集

経済学批判と弁証法　未来社刊　¥四八〇〇円



コラム■映像

映像映画はだれのものか

松山秋邦

テレビを見ていると、やたらと映画のCMが流れだされてくるのに気づく。最近妙に映画のことが気になりだしたが、映画を見ようとする欲求を持ちえない私に、それは命令する―映画を見にいくべきだと。見たいとか見たくないとかいった感覚は排除され、見るという行為の強制を行う。それが何度もくり返えされる。私は一種の強迫観念にかられ、いつのまにか、あのすごい映画を見ないと仲間との話題についていけないぞとか、皆なから世間一般から取り残されるぞといった思いにかられてしまう。

自分が属しているのであろう集団から除外されたくないといった理由で、集団を考えながら個々人が主体を失なったところで、CMに圧倒され、集団としてどうこうだろうと個々が決定してしまい、それを依りどころにして考え、行動するのである。

そこでは、映画の内容は完全にオミットされてしまいただほとんどの人々に上映が認知され、話題になっている状態に対して、内実がとりもなお素晴らしいものだと信じられ、見るべきだと思いこまされるのである。

私自身に対して、そうした強烈なイメージがおおいかぶさってくるのである。

特に、他のCMがソフトムード化戦略の中で、また現実とCMとが接近しているとか、既成の概念が有効な指標として確立している中にあっては、時間を中心とした

THE DIRTY „GAS WAR„ IN S. VIETNAM.
TIME
LIFE
LM
D.C
TWA
FRANKLY..FELLOWS...
I SMELL THAT DAMN GAS IN EVERY AMERICAN „THING„!

ところの強烈な勢いのCMは、私たちの意識の深層に無意識的に固着するのである。私たちは、こうして「客体」でありつづけることから抜けだせずにいる。しかも、意識されないものとしてである。

そうした中で、私たちは商品認知における無意識ではあるが日常的な思考性を充分な程に解体されつくし、自己の内部に不可思義な幻想を育てあげる。

「客体」の中で幻想を与えられ、見る対象から見なければならない対象、見せられる対象へと転化していくのである。その転化の中で映画は、勢況なる健全な娯楽として存在し、理解されていくのである。

こうした、大量のスポットCMによる人々に破滅的に認知されていく方法と共に映画製作は、メジャーにあっては周期をくんだ大作主義になってきたのである。

このような方法は、出版業界の変革に類似している。すなわち、良書であれば、書評と一定の宣伝とで期間を経れば、売れていくといった意識にあり、活学離れという大衆の傾向からジリ貧状態に追いこまれていく中、神吉カッパブックスが新聞を主体にした大々的な宣伝戦略と、一般受けする内容をもった題材の発掘による、「欲しい」本ではなく「売るべき」本をマーケティングを充分に行い、売れる体制を作りあげベストセラーを生みだしていった方法とである。

今、映画界の先駆であるような角川春樹は、それをふまえ、書籍文庫(本業)の販売を重層的に行うべく、戦略を展開している。文化の商品化を通して。

一人の重点販売作家をしたてあげ、大量のCMを中心とした広告活動を展開し、フィナーレとしての映画—音楽を作る。それによって映画—文庫本に相乗作用を生みだし、売り上げを伸ばしていく。

彼が横溝正史を引きづりだしブームに仕立てたのはこの方法であったが、森村誠一の「人間の証明」以降では角川は計算しつくった上で、可能なかぎりのメディアの連動を求めて計画された状態において、販売をなしていった。本と映画とTV・CMと、更には音楽をその範疇に入れた段階での連動によるメディアの増幅作用をフルに稼動させてかせぐのである。それについて彼は次のように語っている。

「音楽と活字と映画とが見事に合体した時には、それは別の生き物として登場してくる。それは僕の手にも買えないような生き物、つまり社会現象になっていく。広告の最終的な目的は何かというと、僕は暴力だと思っている。広告は最終的には社会現象という暴力を目指すものだと思っている。」(宣伝会議)

彼が扱っている商品が、単なる物質ではなく、文化というものをトータルな面から資本主義的に商品化した映画・書籍・音楽であることに注意を払うべきだ。そうすれば、彼の広告による社会現象という暴力性は、単に広告の破壊性—感覚の腐敗にとどまらず、文化総体における私たちの感性を奪い、意識を新たに創出するものとして存在しているのではないかといった疑問が充分に根拠あるものとして明らかになってくる。

彼自身が述べているように、「マイン・カンプ」による大衆操作のファシズム性が暴力の質としてとらえられているのである。それは、ヒトラーの「一般大衆は聡明ではない。彼らの理解力はいたって乏しい」「大衆は小さな嘘よりも大きな嘘を信じやすい」「大きい嘘を何度もくり返せば真実になる。」という言葉によって示されているだろう。何度もくり返されることで、「真実」ができ上り、人々はそれによって心身を破壊され何事をも誘導されるまま受け入れてしまうのである。

ここにおいて映画のおかれている立場は、単なる娯楽作品としての健全性を持ちうるのではなく、充分なる精神構造への解体剤として、人々を支配すべき手段へと変換するのである。

もっとも、映画が純粋に娯楽でありえた時代が存在しえたのか否かは判断の下しえないところであるが、例えば、アメリカにおける代表的娯楽映画である西部劇の役割を見るならば、そうした思いもあながち過ちではなかろう。

西部劇それは、西部をめぐる大衆のフロンティア幻想と深く結びついており、展開されるドラマは常に、正義としての貧しいが明日を信じる—繁栄が見えており、努力がそれと結びつく田舎町の人々と、それを破壊しようとするアメリカインディアン、メキシカン、あるいはアングロサクソン系以外の白人等の悪者といったふりわけの下で行なわれる。背景には豊饒だが厳しい自然をおき、見る人々の心を高揚させる。そうした設定の下、繁栄を生みだそうとする人々の開拓（進歩）の正義には、他民族—他人種の犠牲は仕方ないし、それを否定したり、自己の利益のみを求めるものは、大義の名のもとに抹消されても仕方ない。唯々協力することを求め、応ずれば、勤労な人々の得た富を分ける、分け与えてやるといった思考が流れていた。

それを現実に照しだすなら、対黒人・ユダヤ人・イタリア系人民との因難な問題の解決がせまられていた。

彼らは、映画—画面に政治に対する幻想イメージまで連動させるのである。しかもそれは、彼らが信じる正義

と力の論理の下で世界的に存在しつつも、西部劇が西部の終焉と共に始まったということに証される幻想そのものの現われでしかないという悲しさにつつまれ、束の間の豊かさと強さの上での夢だと、六〇年後半に知らされることで急速に衰退していったのであった。それを明確に告げたのが、「ソルジャーブルー」であったかもしれない。

しかし、彼らは最後のアダ花として見果てぬ夢を求めてマカロニウエスタンを見たのであった。

このように、私たちは、あらかじめ意図された状況の反映を含んだところの映画を見ており、見せられている。これはとくに情報の発達した現在、より一層重要な拠点として存在する映像においては、かつては意図された銃制をはねのけ、あるいはかいくぐり、製作されてきた自由さ—豊かな創造力—想像力が拒否されていくのであった。

そうして、映画は、自らの主要な活力を放棄していまい、人々に、あらかじめ他の情報媒体たるTV・CMによって与えられた予断—概念を固定化させる方向性でもって、内容を示しだす。そうして見る側も想像力をつみとり与えられるものを深層に蓄積し、想像という働きを・なくした感情のみを自らの内部に育てあげる。そこにおいて重要な働きをなすものに映像と結びついた音楽がある。それは、私たちの心を開け放ち、無警戒な状態をかもしだすのに有効な手段として、さらには導入されたものの根として深く植えつけるのにすばらしい機能を示す。開け放たれ、無意識的に方向性を与えられた精神においては批判—批評の眼をもつことは中止—停止してしまい感性の発芽はなしえぬまま、寄生をするしかなくなるのである。

それを、私たちは負い目としてとらえてしまい、それ故に、「黄いハンカチーフ」といったきわゆて小市民的・道徳主義的な偽善映画に感動してしまい年度NO1に選定する。それがますます感性を寄生から抜けだせずにいるといった形態を作りだし、「真と偽・嘘を」結合、並列化する。

こうして解体された精神は肉体を支えることができずに、肉体は即時的欲求を求め、肉体自体も解体される。

こうした見方に対して多々批判は存在するだろうが、例えば、自主映画を中心とした新たなメディアの存在をどう念頭に置くかと云えば、それらが、マイナーとしてきわめて自己満足的にあるいは、「反体制」なんぞ古いんだといった形から出発した自らのキバを抜いている状態、そして流行としの趣味性を突破できえていないこと

を考えるなら、そして最後に、マイナーは自主映画製作者がメジャーに認知されるや否や、彼らは見事に懐柔させられ、自らの毒素を流して解消してしまう現実が存在することを見れば否定しなければならなくなる。

その理由は、基本としての自らの生活—文化空間をとりもどし得ずにいるからだ。自らの身体を預けたまま、対抗文化の創出は不可能だろう。製作の主体が向うにあるのだから、技術のみを述べても何事も生まれ得ない。

本当に対抗し、自らの文化を—映画・映像を造るためには、感性と共に空間の獲得が必要となる。種をまいて育てあげれるだけの空間が。

私たちはまだ映像・映画に対して従順であったり、あきらめたりはしていないのだから、空間をとりもどし、肉体と精神の結合した言葉—行為をもって、なによりも私たちにとって必要な—重要な映像・映画を創りだせるのではなかろうか、根が腐らないうちに。

（社会学部四回生・まつやま　あきくに）

ランボー研究余滴　13

ランボーの沈黙と最期

山村嘉己

（ミュンシュ画）

1

われわれは今やランボー研究家にとってもっとも苦痛な時期に到達した。それは一八七五、六年以降、つまり、かれが、少くともあからさまな形では、いわゆる詩的製作を放棄した時期である。もちろん、この時期におけるランボー自身の苦痛は、それこそ心身ともに想像を絶するものであっただろう。しかし、その苦痛がわれわれが努力して跡づけるだけの普遍的な意味を持ちうるかどうかがわれわれにとっては大切な問題なのだ。したがって、≪たとえば一八七五年すでに、ランボーの中の意識的人間は、「人生を変える」ことを断念していた≫と判断するイヴ・ボンヌフォワなどは、≪私はこの本の中で、彼の彷徨ときびしい労働の歳月を語ろうとしない≫（『ランボー』阿部良雄訳・人文書院）。それは≪運命の私的な性格≫を尊重したいからだと語っている。われわれもそのひそみにならって、ランボーとともに沈黙を守るべきかもしれない。

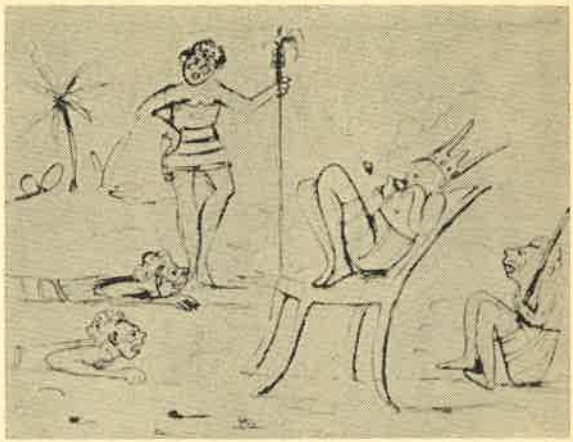
しかし、一方、短かいとはいえ三十年をこえる生涯の

うち、わずか数年の文学生活に力点をおくあまり、その他の一切を無視する考え方は真のランボー像をゆがめるものであり、むしろ、その後半生のかれの生き方から、その数年の文学生活を逆透視する必要があると説く説も当然存在する(たとえば『ランボーの沈黙』の竹内健氏の試みはそのすぐれたものの一つである。)。あるいはまたランボーの一生はその文学生活も含めて、一貫した生き方に貫かれているので、その観点から、かれの沈黙を洗い直してみねばならないという考え方もなくはない。(たとえばM・リュッフのランボー論)。竹内健氏のように、文学から訣別したあとのランボーに≪ランボーの裡なる暗闇の荒野≫を浮び上らせる稲妻の光をより多く見うけられると考えるのもまた、われわれの自由なのである。

いずれにしても、ランボーの沈黙はそこにあり、われわれはその事実の前に先ず凝然と立ちつくすしかない。しかし、それから、われわれは自らの文学観にしたがって、もろもろのランボー像を創出する。すでに一八八六年三月、『ヴォーグ誌』に『イリュミナション』を発表するに当って、その編集者ギュスターヴ・カーンの脳裏をよぎったのは、砂漠のはてに姿を消し去った死せるランボーの姿であった。詩人としての栄光を全うさせるためには、武器商人のランボーは死んでいる方が都合がよかったのだ。デカダン派の後継者レイノーはもっと正直に、≪人々の好奇心に訴え、われわれの主張をより強固にするため、われわれはデカダン派の理想的タイプをアルチュール・ランボーに着せかけようと試みた。噂では、彼は永遠に地平の涯に姿を消し、自然の生活に回帰し、蛮族の王になったという事であった≫(竹内健、前掲書より)と、述べている。その後の人々の解釈はもっぱらこの方向からなされた、ブルトンらシュールレアリストがランボーは≪生活の実践やその他の点で≫シュールレアリストだと認めるまでは。この≪生活≫のあり方を問題にする点では、アラゴンのようなコミュニストたちも同様であった。かれらはランボーの生き方全体を当時のブルジョワ社会への鋭い批判として評価している。そしてサルトルやカミュのいわゆる実存主義者たちにとってもランボーはまさしく≪不条理の大冒険家≫(カミュ)だったのであり、サルトルのつぎのような規定はランボーの試みの非常にすぐれた解説といえるだろう。

ランボーがかれ自身の創作者となろうとし、その試みをあの有名な≪私は他者だ≫という言葉によって定義するとき、かれはためらうことなくかれの思想の根

源的な変革を行おうとしたのであり、あらゆる感覚の組織的な錯乱を企図し、ブルジョワとして生まれつきもっているいわゆる本性――その実、たんなる習慣でしかないものだが――を破壊するのである。かれは芝居を演ずるのではなく、本気で異様な思想や感情を創出しようと努力する(サルトル『ボードレール』)。



黒人の王ランボー　(ドラエー筆)

2

さて、実際のランボーが少くとも七五年のシュトットガルトにおけるヴェルレーヌとの衝突以後、文学的製作をほとんど完全に放棄したようにみえるのはたしかである。友人ドラエーあての手紙に見られる「夢」という短詩はその何よりの例証とだれもがいう(たとえばボンヌフォワ)。

兵舎ではだれもが腹ぺこ――
　その通りだ……
放射だ、爆発だ。ひとりの精いわく、
　「おれはグリュエールだ!――」
ルフェーブルの叫び、「酒蔵だ!」
精またいわく、「おれはブリーだ!――」
兵隊たちはパンを切りながら、
　「これが人生さ!」
精さらにいわく、「おれはロックフォールさ!」
　――やがてはおれたちお仕舞か!……
　――おれはグリュエール
そしてブリー……などなど」。

兵舎とパンとチーズという、およそもっとも詩的でない素材を、はげしい口調で投げ出すようにうたうこの文章は、その後に理工系のバショ（大学入学資格試験）に関する質問を伴っているだけに、よけいランボーの詩からの離脱を決定的なものにしているようにみえる。

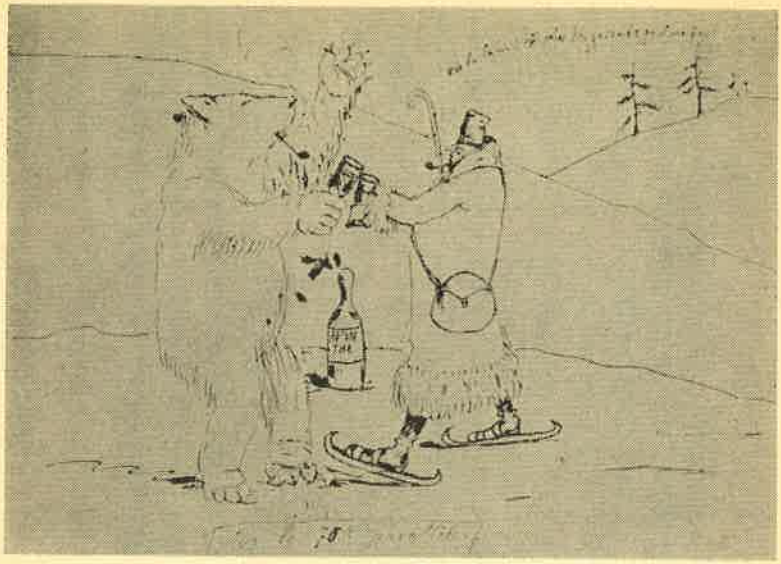
あるいはまた、ボンヌフォワがさらに指摘するように、このころきわだって目立つ数多くの外国語へのかれの趣向を、≪ひとつの国語を絶対視することによってしか作れぬ≫詩への関心の喪失ととり、また、そのような≪言語をその相対的な諸相の下に学ぶという行為の中に詩に対するひそかな否認≫を見てとることも可能であろう。いずれにしても、この七五年からの数年にわたってランボーは実に精力的に各地を渉猟してやまない。その一々をここに詳細にのべる余裕はないが、きわめて簡単にかれの足跡をたどってみるとつぎのようになる。

七五年　四月、ドイツを去ってイタリヤのミラノへ。ここで病をえてある未亡人の看護を受ける。五月末なお南下するが日射病のため倒れ、マルセーユへ送還。のち、パリを経て十月にはシャルルヴイルへもどる。この十二月、最愛の妹ヴィタリーを滑膜炎でなくす（十七才）

七六年　三月、北回りで中近東を目ざすが、オーストリヤのウイーンで辻馬車の馭者に身ぐるみはがれ、やむなく引返す。五月　再び出発、オランダに出、外人部隊として雇われジャワに向う。八月　バタヴィアで脱走、希望峰を経由してリヴァプールにもどり、年末、故郷に帰る。

七七年　春からオランダやドイツを廻って外人部隊の徴兵官になろうとして果さず、ブレーメンでアメリカ海軍への入隊を希望したが断られる。つづいてハンブルグでサーカス一座の事務をとったという説もあるが、とにかく、秋にはシャルルヴィルへもどっている。冬、もう一度南へ進み、マルセーユから船でアレクサンドリアを目ざすが、高熱のため下船させられる。

七八年　春、またまた出奔、今度は行先は確かでないただ≪パリにいたことは確かだ≫というドラエーの報告がある。しかし、この夏にはロッシュへの一家の転住があり、ランボーが一時であっても野良仕事に従事したことは間違いない。（≪風の蹠（あしうら）を持つ男は決定的に洗い上ってしまった。まったくそれきりさ≫（ドラエーよりヴェルレーヌへの手紙））。それでも、秋にはもうがまんができなくなったかれは、



北極のランボー　(ドラエー筆)

スイスへ向け出発、さらにサン・ゴタールを経てジェノヴァに向う。十一月末、アレクサンドリア行の船に乗り、今度は十二月十日に到着、キプロス島へ渡り、E・ジャン&ティアール息子商会で労働者の一団を受けもつ通訳となる。

七九年　すごい暑さで、岩と砂ばかりの島、荒くれ男のなかにまじってランボーの生活はそれでも一種の充実感があった。しかし、六月、急の熱病がかれを襲い、腸チフスと診断される。やむをえずロッシュにもどり、家を手伝う。この九月、ロッシュでランボーにあったドラエーは文学のことを聞くと、「もうそんなものはやっていないよ」と、とくに軽蔑の語気でかれが答えたと報告している。その後、病気の全快も待たずまた南下したランボーは、高熱をぶり返して再び帰国せざるをえなかった。この冬、兄は《家畜小屋の暖気のなかでしかくつろげなかった》と、妹イザベルが報告している。

八〇年　今度こそ二度ともどるまいと覚悟をきめたランボーは三月故郷を後にする。同じようにアレクサンドリアからキプロスへわたったが、ティアール商会はすでになく、やむをえず、別の会社に身を托すが、最後には喧嘩をして島を離れることになった。

ときに七月。わずか四百フランの金を懐にランボーは待望のアフリカ、それもさらに遠いアビシニアへと向う。

この目まぐるしい移動ぶりはまさしく≪新版さまよえるオランダ人≫(ドラエー)の名にふさわしく、その応接にいとまない思いをわれわれに与えずにはいないが、しかし、この動きのなかにはまだ自らの可能性と希望をどこまでも試し抜こうとする不抜の決意がほの見える。ヴェルレーヌたちは、このかれにオメーというあだ名(『ボヴァリ夫人』の登場人物で、俗物ブルジョワの典型)を奉って揶揄するが、このころのランボーの文学の拒否の姿勢のなかには、無理にも自らのなかの衝動を押え込もうとする強い意志の働きを認めずにはおれない。しかし、さらに南へと進んだこの後のランボーはたしかに見事に≪美神を扼殺する≫ことに成功する。そして、それと同時に、≪アデンとジブチ、ゼイラーとハラルとのあいだにみずから張りめぐらした蜘蛛の糸に捕えられて、かれはこの地獄から、死に触れられることでしか脱け出すことができないことになったのであった≫(プチフィス、マタラッソ『ランボォ』)。

3

一八八〇年から九一年にわたるアフリカの十年は、これまでよりもずっと激動と波瀾にみちている。これを詳細に跡づけることはとうていがまんのできない思いがするといっても過言ではない。

ぼくの一日は終った、ぼくはヨーロッパを去る。海の大気がぼくの肺を灼くだろう。辺境の気候がぼくの肌をなめすだろう、泳ぎ、草を踏みしめ、狩りをするのだ。とりわけて煙草をすうのだ。――にえたぎる金属のような強い酒を飲むのだ、―あのなつかしい先祖たちが焚火のまわりでしたのと同じように。

鉄のような手足、黒ずんだ皮膚、狂ったような眼、そんな姿でぼくはもどってくるだろう。ぼくの顔を見れば、だれだって強力な種族の人間と思うだろう。ぼくは黄金を手に入れて、無為残虐の人となろう。……

(『地獄の季節』「卑しい血筋」)

恐らくはこのような世界をつねに念頭におきながら、その実、じょじょに真の地獄の底へ落ち込んで行くかれ

の姿には、まさしく眼をおおうものがある。しかし、このはてしない地獄の道行のなかに垣間見せたあの地理学の報告記への情熱、あるいは家族への手紙のなかに時折り閃かす美しい感受性の発露には、かれが、明らかに形を変えてはいるが、つきせぬ≪人生を変える≫意欲をけっして失ってはいないことを示すりっぱな証拠を見出すことができるともいえよう。以下、さらに簡潔にアフリカでのかれの行動を年代記風に追ってみよう。

八〇年　八月、アデンに到着、リョンの商社ヴィアネー＝バルデー商会のピエール・バルデーに雇われる（≪アデンは恐しい岩地です。草一本なく、飲むに適した水一滴もありません。蒸溜水を飲んでいるのです≫八・二五家族への手紙）。十月、ピエールの兄弟アルフレッドが、駐在員パンシャールを伴ってハラルより帰り、ランボーをパンシャールの補佐としてハラルへ派遣しようとする。冶金学、鉱物学、水理学など多くの技術書を注文、新しい世界への意欲を示す。十一月出発、ゼイラー港よりソマリ砂漠をへて十二月ハラルに到着。（≪この国は不愉快なところではありません。今はフランスの五月の気候です≫八一・一・一五家族へ）

アビシニア地図

八一年　不愉快な出来事（病気、パンシャールの辞職、不潔な現地人との接触）が相つぎ、直ちにペシミストになる。アルフレッドがやってきて介抱し業務を整備。六、七月、牛皮や山羊皮の買つけに一役買う。しかし、心は慰むこともない。（≪ああ、ぼくといえば人生に全然執着してはいない。今、生きているとすれば、疲れて生きることに慣れているからなのです。しかし、今のように疲れて生き、こんなひどい気候のなかではげしくもあれば、馬鹿げてもいる苦痛で自分を養いつづけて行かなければならないと

すれば、自分の命を縮めかねない気がするのです≫五・二五家族へ)。九月はじめ幹部とごたごた、辞職を申し出て、十二月ついにハラルを去る。

八二年　アデンにもどって、探険家になり、旅と発見にすべてを捧げようとする。これこそがかれの真の願いなのだ。ドラエーに専門書と、経緯儀、六分儀、羅針盤などの送附方を依頼、またリョンに上等の写真機を注文したりしている。またザンジバールの領事館に自分を売り込みもした。しかし、この年はアデンから移動していない。

八三年　一月、アラブの人夫たちといざこざを起こし警察沙汰となる。アルフレッド・バルデーに救われる。かくて、バルデーと仲直りしたかれは四月末、ハラルにもどる。このころ写真をさかんにとる。自分の肖像画を家に送ってもいる。八月、使用人ソテイロをオガデン地方に送ったかれは、続いて自らも調査の上この地方に関する調査報告書をかき上げる。アルフレッドが仲継ぎして地理学協会に送られたこの報告書は翌年二月の同協会機関紙に発表され、人々の注目を集めた。協会はアルバムにのせる写真と略歴を送るよう依頼したが、かれはこれに応じていない。

八四年　英国とエジプトの対立によってアビシニア地方の情勢が悪化。またバルデー商会のリョン本店が倒産、そのためハラル支店をたたんで、ソテイロとともにアデンへ。バルデー兄弟が再建のため帰国した留守を守る。(≪ここでは暮しは途方もなく高くつき、とくに夏がはじまると生活はたえ切れぬほど退屈です、それにここは世界中で一番暑い夏なんですから≫五・五家族へ)。バルデー兄弟は再建に成功し、ランボーも再契約(この年の末まで)を行う。このころ、かれはひとり暮しではなくアビシニアの女性と同棲していた。その女は≪かなり美しい容姿で顔立ちも整っていた≫という。

ハラルのランボー

八五年　相変らずの充されぬ日々。≪ただパンをえるための労働≫として、さらに契約を一年延期する。（≪世界はじつに大きく、千人分生きても訪ねきれないほどのすばらしい国々にみちています。しかし一方、窮乏のなかを放浪してみたくはありません≫八五・一・一五家族へ）。十月、ガスコーニュ出身のピェール・ラバチュに会い、ショウに武器を搬入するという計画を聞く。バルデー兄弟に辞表を出し、かなりのいざこざの後、自由となった。かれは新天地を目ざすが、手続きの複雑さ、人夫のストライキなどで遅々として計画は進まず、十二月、ようやくダンカリ人の小さな村、タジュラーに到着。

八六年　しかし奥地への道路を整えるため、なおしばらく待たねばならない。≪アフリカではどんな小さな計画でも思いがけぬ不都合に会いやすく、並大低でない辛抱が必要なのだ≫（一・三一家族へ）。四月、すべてが整って出発というとき、英国領事からの武器輸入の禁止令が出る。早速ラバチュと連名、フランス外相に嘆願書を出し、せっかく許可を得ると（六月）、今度は、ラバチュが癌に倒れる。しかも同時出発の予定の商人も急死。やむをえず、九月二十日すぎ単独で五十頭のらくだ、三十四人のアビシニア人より成る隊商を率いて出発したが、このときラバチュの死が報じられた。アンコベルへの道、それは≪月の情景もかくやと思われる恐しさ≫であった。しかも、労苦の果て、数十日を費して辿りついたショワでも、王メネリックにはなかなか会えなかった。

八七年　二月六日、アンコベルに着いたかれらに、メネリックが戦いのため不在であることが告げられる。そして王からの指令を待って滞在中のランボーにいくつもの不愉快な出来事が降ってわいた。曰く、ラバチュ夫人との遺産処置の問題、曰く、らくだひき人夫とのいざこざ。ほとんど意気消沈したかれは王の返事を待ってほうほうの態でエントットへ向う。ここでようやくメネリックに会うことができたが、この王のかけ引きの巧みさはとうていランボーの及ぶところではない。期待していた額の四分の一にも値切られ、しかも手許に金がないという。そこへ、ラバチュの仲間ということを聞きつけた小さな債鬼たちが押し寄せてくる。ランボーはもう欲も得もなくハラルへの帰途を急いだ。フランス人の探険家ジュール・ボレリが同行した。この道はまさしく、かれらが初めて切り開いたもので、後の交通に大きな影響を及ぼすこととなるが、この際の二人の記録が

際立った対照を見せて非常に興味深い。とくにボレリの文章の物語的文体と、ランボーのそれの乾いた報告記的な味わいとを比較すると、ランボーの当時の表現への姿勢を改めて検討し直す必要があるのではないかとすら思わせる。かくて五月下旬ハラルに着きその町の悲惨な変り様に仰天しながらメネリックからの金を待ち、さらに旅を重ねて、七月二十五日、やっとアデンに帰着することができた。《この悲惨な事業のために過した二十一ヶ月にわたる苛酷な疲労は別として、わたしは自己資本の六〇パーセントの損失を以てこの事業を終るものです》（七・三〇）と、ランボーはアデン駐在のフランス領事に報告している。この損失のほかにはすぐれたオーストリア人アルフレッド・イルグを知りえたことが収獲といえば言えたであろうか。

4

同じ年（八七年）ではあるが、このアデン帰着以後のランボーは、とつぜん大きな衰退の色を見せる。八月、パスポートも持たずアデンを出たかれは、エジプトのイタリア領マッサウアに上陸し、逮捕された。領事館への問い合せによって身分は確認され、かれはカイロまで旅行を続けることができたが、かれの精神も肉体も、もう限界状況に達しようとしていた。カイロから家族にあてた手紙（八・一三）はその苦悩の偽らざる告白といえる。

この何日か腰のリューマチで困っています。地獄に堕ちるような苦しみです。左の腿にもそれはあり、時々麻痺状態になります。左膝の関節も痛いし、右肩も（これはもう古くからですが）リューマチです。髪の毛は完璧に灰色となりました。もう生命も長くないようです。……ぼくはめちゃくちゃに疲れました。今のところ、仕事もありません。今の少い持ち合せがなくなりはしないかと心配です。腹帯のなかにいつも一万六千何フランの金貨を抱えているぼくを想像してみて下さい。それは八キロもします。赤痢にでもやられそうです。

しかし、いろいろな理由から、ぼくはヨーロッパにもどれません。先ず冬になれば死ぬ思いでしょうし、それから、放浪の根無し草の生活になれてしまいました。そしてつまるところ、定職がありません。

だから、結局はぼくの残る生涯は、ただ苦痛のうちに死ぬだけだと思い定めて、疲労と窮乏のなかで過さ

れるでしょう。

≪ヨーロッパの水を望むとならば、風薫る夕まぐれ、暗く冷たい水たまりに…≫（「酔いどれ船」）と唱ったあの切ない思いがランボーのなかに無かったとは言えまい。しかし、それをあえてこのように言い切らねばならないかれの胸のうちに、われわれは一入暗然とせざるを得ない。

しかし、苛酷な運命はなお数年の流浪をかれに強いる。カイロの後、もう一度アデンにもどったかれは、先ずロバを、つづいて小銃を、さらにメネリックに売りつけようとする。八七年末から八八年にかけてかれはこの計画に熱中した。一度はアルマン・サヴレと結んで、ハラルまで小銃を護送したこともあった。しかし、今では肉体的にも精神的にもこうした作業は困難となっている。かれは一度でそれから手を引いてしまった。そして、八八年五月、新しく知り合ったセザール・ティアンと共同し、ハラルでティアン商会の出店をもった。以後三年の長きにわたり、かれは珍しくもティアンとはいざこざを起さず、この仕事を続行した、相い変らず≪うんざりしています。ぼくほどうんざりしたことのある者を今まで一人だって知らぬくらいです≫（八八・八・四家族あて）などと呟きながら。もうあまり冒険には手を出さない。≪一夜にして百万長者になれる望みなどはない≫（同上）。いろいろな証言によれば母親ゆずりともいうべき禁欲僧のように切りつめた生活をしていたという。それは見方によれば痛ましいほどの小市民的生活のあり様だった。あれほどかれが憎悪していた安穏な生き様への傾斜であった。

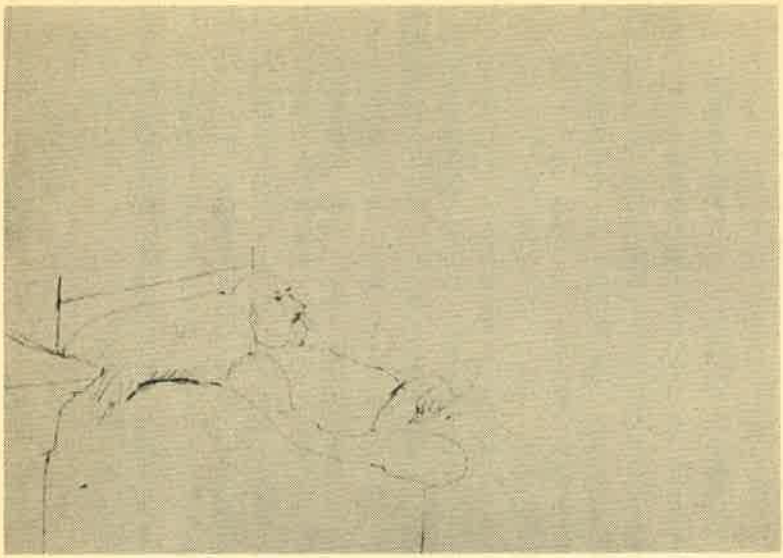
そのくせ、よく問題になる奴隷売買についても、プチ・フィスらの証言によれば、かれの商売へのあくなき意欲ととることもできる。しばしば引用してきた手紙のなかの表現でも、家族への訴えという甘えの構造を考慮に入れれば、その悲痛さもかなり割引きせねばなるまい。それゆえ、われわれは業にも似たかれの飽くなき≪生を変えよう≫とする意味のみをこの≪沈黙の生活≫のなかにも見るべきかも知れない。つまり、詩的といわれ、文学的と称される表現とは異質の、われわれの存在の根底をゆさぶるような表出欲を。もちろん、文学はあくまでも言語表現の世界であろう。しかし、言語表現はまた全身的作業であることも疑いえぬ事実である。ランボーがその沈黙によって、何よりも雄弁にわれわれに訴えかけるのはそのことであるように思えてならない。

それにしても、死は、そしてその死を呼ぶ病いは、確

実に、そうした人間の営みを根源から覆してしまう。九一年二月の手紙に≪ぼくは今身体がよくない。とにかく右脚に静脈瘤ができて、すごく痛むのです≫と訴えたかれは、四月三十日にはもう母親に≪ぼくは骸骨です≫と泣きつくほどに到っている。かくて五月六日、ティアンよりもらった額面三万七千四百五十フランの手形をその総決算として懐にしたかれは、五月二十日、マルセーユのコンセプション病院に運びこまれた。「腿の組織異常新生」という病名であるが、一種の癌性の腫瘍であった。右脚切断は避けることはできない。母はその旨の電報を受けとって急いで馳けつけてきた。いつも反逆しつつまた頼らざるをえない母。今度は十年にあまる期間を隔てての対面であった。はげしいショックを抑えた気丈な母は絶望に陥ったランボオに勇気をもってこの試錬にたえよと雄々しく説き聞かせた。二十五日、切断手術。手術後の経過は順調であった。母は二週間あまり、枕頭を去らず、優しく看病した。≪アルチュールの涙がわたしをぐらつかせたのです≫とかの女は娘に報告している。事実、ランボーは ひどく心よわく涙もろくなっていた。≪ぼくについて言えば、ぼくは昼も夜も泣いてばかりいる、ぼくは死んだ人間だ、生涯不具となったのだ……≫（六・一二三、イザベルへ）≪ぼくの過ぎ去ったすべての旅を思うと、何という倦怠、何という疲労、何という悲しさか。それに、たった五ケ月ほど前までは、ぼくは元気だったのだ。いったいどこへ行ってしまったのだ、あの山々を馳けめぐり、馬に乗り、歩き廻り、砂漠や河や海をこえた生活は。それが今ではいざりの生活なのだ。というのもようやくぼくにも分りはじめたからだ、松葉杖や木の足や、機械の足なんてなんの役にも立たず、そんなものをどれだけ使おうと所詮は何ひとつできもせず、ただ惨めにはい廻るだけだということが。この夏には結婚するためにフランスへ帰ろうと決めたばっかりのこのぼくが！ああ、結婚とさようなら、家庭よさようなら、

PENSIONNAIRES 10 FRANCS
HOSPICE DE LA CONCEPTION
BILLET DE SALLE
SALLE Officiel LIT N°
L'Administrateur de Service,
MALADIE Neoplasme
BILLET DE SORTIE

コンセプション病院の入院書類



病床のランボー（イザベル筆）

未来よさようならだ。ぼくの人生は終った。ぼくはもう動くことのできない丸太棒でしかない≫（七・一〇、イザベルへ）。

母に代ってこの妹イザベルがかいがいしく看病をした。急を聞いた友人たちからの見舞や激励の便りが殺到した。その多くの文面はまさしく感動的なものでさえあった。しかし、それらはランボーを力づけるどころかかえって涙にくれさせるばかりであった。かれはとつぜんロッシュへ帰ると言い出す。しかし、雨の多かったその年のアルデンヌの夏はランボーの身体には合わなかった。僅か一月の滞在のうちに、またまた、南国の太陽がかれを呼んだ。マルセーユへ帰るのだ。そこにはアデンへの船がいつでも出港できるようにかれを待っている。思い立つと猶余できないのがかれの常であった。はげしい痛みに油汗を流しながら、かれはパリ経由でマルセーユに向った。献身的に兄につくすイザベルが同行した。これから以後のランボーの動静については、もっぱらこのイザベルの報告をまつほかない。いささか自らの判断に執するきらいがなくはないが、それでも愛情溢れたかの女の記録はそれだけでも十分われわれの興味をひくものとなっている。以下それに基いて≪死に臨むランボー≫を眺めてみよう。

5

先ず九月二十二日づけのかの女から母へあてた手紙がある。何人もの医者に聞いたところ、≪かれは死に近づきつつあるかわいそうな人≫だという。もう数ケ月もつかどうか。直る希望はほとんどないのだ。食べ物は比較的食べ、顔色も回復はしたが、眼のまわりの隈はとれず何よりも痛みと麻痺がまったく去ることはない。汗をかき、頭痛を訴え、眠っても悪夢ばかりを見る。それよりももっと哀れなのは，平静なときの気の弱さだ。かれは始終涙を流している。≪今日の自分の状態と、一年前の自分の状態の相違を思い浮べ、涙を流します。もう働くことが出来ないような未来を考え、涙を流します。こんなにひどく辛い現在を泣き悲しみます。むせび泣きながら、叫びながら、見捨てないように私に哀願しながら、私を抱き締めます。≫（菱山修三訳）さらに十月四日づけのノートは、かれの昏睡中に書かれたもののようであるが、いっそう凄惨な趣きを呈している。ランボーはかなりの錯乱状態にある。かの女は≪かれが馬鹿げたことをしないように≫一日中工夫しなければならない。かれを見捨ててロッシュへ帰るなどとはとんでもないことだ。それに、時折りかれの示すあの優しさはどうだろう。それもまたかの女をつかんで離さない。そして、かの女は十月二十八日づけの手紙であの重大な報告をするのである。≪日曜日の朝、大弥撒のあと、かれはずっと平静で、意識もはっきりしているようすでした。司祭さまのお一人がみえて、彼にざんげをするように申しました。すると後はよろこんで承知をしたのです！司祭さまは病室の外へ出たとき、私に仰言いました、愕いた様子で、ふしぎな様子で私を見まもりながら。「あなたの御兄弟は信仰を持って居られます、あなた。あのかたは信仰を持っていらっしゃる、のみならず、今までにこんな立派な信

イザベル

仰を、私は眼にしたことがありません！」……≪（菱山訳）
イザベルは狂喜し、神に感謝を叫げ、その後ランボーは二度と冒瀆の言辞を口にしなかったと誇らしげに報告する。われわれはここにランボーもついにカトリックにもどった一つの証拠を見出すべきなのだろうか。それとも錯乱に陥入った瀕死の病人にあくなく改宗を迫る信仰者たちの無慈悲な追求を読みとるべきなのか。恐らく真実はこうした両極のいずれにあるのでもなく、もはやランボーにとってはこの苦痛からの解脱以外何も望むものがなかったと考えるのが至当であろう。かれの文学的生活とその後をどう考えるかが、われわれ自身の文学観にいやおうなくかかわるように、かれがカトリックにもどったか否かは、われわれ自身の宗教観によって自ら異った意見を導くだろう。イザベルのような思い入れよろしくかれを自らの枠組に入れるよりは、むしろわれわれはランボーを、優しい無関心のうちに眠らせるべきかも知れない。かくて、その年十一月十日コンセプション病院の記録にはつぎの数行がつけ加えられた。≪ランボー（ジャン＝ニコラ）、商人、シャルルヴィル生まれ、マルセーユ滞在中、一八九一年十一月十日午前十時死亡。病名、全身癌腫症≫

（文学部教授・やまむら　よしみ）

書籍だより

刊行全集一覧

一月日本の原始美術全一〇巻
講談社　一八〇〇円
昭和萬葉集全二〇巻別Ⅰ
講談社　（特価）　一三〇〇円
史料京都の歴史全一六巻
平凡社　六二〇〇円
国史大辞典全一五巻
吉川弘文館　八八〇〇円
二月日本の伝説（第四期）全一〇巻角川書店　九八〇〇円
編年百姓一揆史料集成全一六巻
三一書房　一七〇〇〇円
ヴァンタン現代日本美人画集全一二巻
集英社　（特価）　一二〇〇円
図説日本文化の歴史全一三巻
小学館　（特価）　二八〇〇円
法律学教村民法全六巻
東大出版　三八〇〇円
定石全科全六巻
平凡社　九五〇円三
三月奈良六大寺大観（第二次）全十四巻
岩波書店　二六〇〇〇円
三月岸田劉生全集全一〇巻
岩波書店　三〇〇〇円
牧野巽著作集全八巻

御茶の水書房　四五〇〇円
今中次麿政治学論集全七巻
御茶の水書房　四〇〇〇円
サミュエルソン経済学大系全一〇巻
勁草書房　三八〇〇円
栗田勇著作集全一二巻
講談社　一八〇〇円
阿含経典全四巻
筑摩書房　一八〇〇円
日本の美術全二九巻
平凡社各　一八〇〇円
四月世界の聖域全一八巻
講談社　三八〇〇円
頼原退蔵著作集全二〇巻別Ⅰ
中央公論社　二二〇〇円
講座現代の人間学全七巻
白水社　二四〇〇円
ラシーヌ戯典集全三巻
白水社　三五〇〇円

三沢勝衛著作集全三巻
みすず書房　三五〇〇円
四月八幡一郎著作集全六巻
雄山閣　五八〇〇円
五月人間探究の社会心理学全五巻
朝倉書店　一八〇〇円
岩波講座現代化学全十七巻
岩波書店　二六〇〇円
岩波講座子どもの発達全八巻
岩波書店　一八〇〇円
ゲーテ全集全一五巻別Ⅰ
潮出版（特価）二九〇〇円
池田彌三郎著作集全一〇巻
角川書店　三二〇〇円
日本古寺美術全集全二五巻
集英社（特価）四八〇〇円
日本城郭大系全一八巻別Ⅱ
新人物往来社（特価）五二〇〇円
楽しみと冒険全一〇巻

新潮社各九五〇円
ジュリアン・グリーン全集（第一期）全七巻
人文書院　三〇〇〇円
新修宮沢　賢治全集全一六巻
筑摩書房　一九〇〇円
宮口しづえ童話全集全八巻
筑摩書房　一三〇〇円
五月燕石十種全六巻
中央公論社　二〇〇〇円
六月大航海時代叢書（第二期）全二四巻
岩波書店　五六〇〇円
数学の歴史　全一〇巻
共立出版　三五〇〇円
エジプトの秘寶全五巻
講談社　四八〇〇〇円
藤村の童話全四巻
筑摩書房各　八五〇円
フロイス日本史（第二期）全四巻
中央公論社一八〇〇円

片岡良一著作集全一一巻
中央公論社　二〇〇〇円
モーツァルト名曲全集全一二巻
中央公論社　七八〇〇円
善田貞吉著作集全一四巻
平凡社　四二〇〇円
続日本随筆大系全一二巻
吉川引文館　二七〇〇円
七月全集樋口一葉全四巻
小学館　二四〇〇円
八月TSミル初期著作集全四巻
御茶の水書房　三五〇〇円
八月五木寛之小説全集全三六巻別I
講談社　各九八〇円
五木寛之エッセイ全集全一二巻
講談社　各九八〇円
日本人の歴史全一二巻
講談社　九八〇円
現代家族法大系全五巻

有斐閣　三五〇〇円
九月日本名所風俗図絵全一八巻別Ⅱ
角川書店（特価）六九〇〇円
日本歴史地名大系全五〇巻
平凡社（特価）九八〇〇円
日本哲学思想全想全二〇巻
平凡社　二三〇〇円
図説人物日本の女性史全一二巻
小学館　一四五〇円
吉川英治全集全五三巻
講談社　五三〇〇円
新体系土木工学全一〇〇巻
技報堂　三五〇〇円
在外日本の至宝全一〇巻
毎日新聞社　七〇〇〇円
一〇月岩波講座文学全一二巻
岩波書店　一九〇〇円
10月会田雄次著作集全一一巻
講談社　一八〇〇円

岡本太郎著作集全九巻
講談社　一八〇〇円
25人の画家世界美術全集全二五巻
講談社　一九五〇円
全集美術のなかの裸婦全一二巻
集英社（特価）三九〇〇円
日本国語大辞典（縮刷版）全一〇巻
小学館　七八〇〇円
アンデルセン童話全集全五巻
小学館　一八〇〇円
おんながつづるおんなのくらし全七巻
筑摩書房　九八〇円
中里恒子全集全一八巻
中央公論社　二〇〇〇円
谷崎潤一郎訳源氏物語全一〇巻別Ⅰ
中央公論社　九五〇円
ビブリオテカ澁澤龍彦全六巻
白水社二五〇〇円
11月石川淳選集全一七巻

岩波書店　一三〇〇円
木下埜太郎日記全五巻
岩波書店　三〇〇〇円
11月与謝野晶子全集全二〇巻
講談社　二九〇〇円
鑑賞日本の古典全一八巻
小学館　一八〇〇円
国際版原色図解大辞典全一一巻
小学館（特価）三三〇〇円
新潮古代美術館全一四巻
新潮社（特価）二五〇〇円
有島武郎全集全一五巻別I
筑摩書房　四八〇〇円
松田道雄の本全一六巻
筑摩書房　九五〇〇円
西洋館の旅全九巻
筑摩書房　二八〇〇円
ニーチェ全集全一二巻
白水社　二八〇〇円

名作挿絵全集一〇巻
平凡社　二〇〇〇円
エネルギー科学叢書全一一巻
共立出版　一三〇〇円
12月日本の伝説（第五期）全一〇巻
角川書店　一一〇〇円
新訂わかりやすい設備工学講座全五巻
彰国社　一六〇〇円
12月日本の産業全五巻
筑摩書房　一五〇〇円

以上が一九七九年一月～一二月の間に刊行が開始された重な全集の一覧です。中には、この一年間で完結したものもありますが、まだ殆んどは、刊行中ですので、定期購読されたい方は、書籍部予約カウンターで申し込んで下さい。途中からの申し込みでも一〇％引になります

尚、一覧表の中の定価は、第一回配本時の定価ですので二回配本以後は、変わってくるものもあります。

お知らせ

書評編集委員会では、書評」誌発行を媒介として文化運動を展開していこうとしています。具体的活動は「書評」誌の編集発行と、講演会、映画会等の開催です。生協本部3F、書評編集委員会までおいでください。なお、編集委員には若干の活動費が支給されます。

投稿募集

最近読んだ本の書評、内容紹介、批判等や、研究成果の発表、論文、エッセイ、小説などの自己表現作業としてあるものをお寄せください。また、「書評」誌に対する意見、批判でも結構です。

投稿規定は次の通りです。

△原稿は原則として縦書きで、一行二五×二二行(五五〇字)を一枚とし計算します。枚数は自由です。なお必要な場合には原稿用紙をお渡しします。

△原稿には住所・氏名・学部・電話番号・連絡先を詳しく明記してください。

△原稿は一切返却しません。必要な場合はコピーをとってください。採用分には連絡します。

△採用分には、資料代として五〇〇〇円を進呈します。

△送り先

〒565　吹田市千里山東三丁目一〇―一　関西大学生活協同組合「書評」編集委員会〇六―三八八一一一二一内線七七六

編集後記

早いものでまたたくまに一年が過ぎた。この一年間にどれだけの活動が展開できたか、と問われるといささかお寒い成果しかないが、ただ言えることは昨年一年間試行した結果、今年の方向は見えたということである。やはり書評活動の停滞の原因は、現象的には編集員不足という物理的側面が強いが、根本的にはいかなる問題意識を対象化して書評活動の基軸とするのかが明確でなかったことにあった。

ある一つの結論はそれだけを取り出してみれば、あまりにも当り前のことであるが、しかし重要なことはその結論を導き出す過程ではないだろうか？　少くとも私たちは試行し苦吟した結果としてのこの結論を大切にしたい。本号は羅針盤にも書いているように、本来一月に発行予定であったが、学費問題により四月発行に延期した。執筆者の皆さんには申し訳なく思いますが、問題が社会的問題であるだけにそれを避けて通るべきでないと判断したからです。この点悪しからずご了承願いたい。本号には故細見英先生の遺稿集「経済学批判と弁証法」の書評を載せることができ、肩の荷がおりた気持です。あらためて先生への追悼としたいと思います。　（編集子）

1980年 4 月号　通巻51号

編集・発行　関西大学生活協同組合・組織部「書評」編集委員会
連 絡 先　吹田市千里山東3-10-1（☎ 388－1121　内線 776）
頒　　価　250円